兵庫県文化財調査報告　第479冊

神戸市北区

平　田　遺　跡

－新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成27(2015)年3月

兵庫県教育委員会

神戸市北区

平　田　遺　跡

－新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成27（2015）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1　本書は、神戸市北区道場町平田に所在する平田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、西日本高速道路（株）関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

確認調査　平成平成22年７月１日～９月２日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成23年11月１日～12月22日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社福島組

平成24年12月19日～平成25年２月22日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：株式会社福島組

（出土品整理作業）

平成26年４月１日～平成27年３月31日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　副課長　長濱誠司が担当した。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真･図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

本文目次

第１章　調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　平田遺跡 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 1
　第４節　出土品整理作業の経過と体制 …… 4
第２章　遺跡をとりまく環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の結果
　　第１節　１区の調査 …… 7
　　第２節　２区の調査 …… 12
第４章　自然科学分析
　平田遺跡における放射性炭素年代（AMS年代） …… ㈱加速器分析研究所 … 20
第５章　まとめ …… 23
報告書抄録 …… 24

表 目 次

第１表　放射性炭素年代測定結果（１） ……21
第２表　放射性炭素年代測定結果（２） ……21

挿図目次

第１図　平田遺跡の位置 …… iii
第２図　平田遺跡調査地点位置図 …… 2
第３図　調査区位置図 …… 3
第４図　周辺の遺跡 …… 6
第５図　１区全体図・溝断面図 …… 8
第６図　SH01 …… 9
第７図　SH02 …… 10
第８図　SB01 …… 11
第９図　SK01・包含層出土遺物 …… 11
第10図　２区全体図 …… 13
第11図　２区南壁断面図 …… 14
第12図　２区北壁断面図 …… 15
第13図　SR01・02断面図 …… 16
第14図　SR01出土遺物 …… 17
第15図　SR02出土遺物 …… 18
第16図　律令期の主要遺跡と交通路…… 19
第17図　暦年較正年代グラフ（参考） …… 22

写真図版目次

写真図版１　遺跡１　　遺跡周辺　航空写真

写真図版２　遺跡２　　遺跡全景（南から）／遺跡全景（南西から）

写真図版３　１区　遺構１　全景（北から）／全景（北東から）／全景（南西から）

写真図版４　１区　遺構２　SH01／SH01東西断面／SH01南北断面／北東隅土坑　断面／北東隅土坑　土器出土状況／壁際土坑　断面／壁際土坑　土器出土状況／中央炉　断面

写真図版５　１区　遺構３　SH02／SH02　東西断面／SH02　南北断面／SH02　中央土坑／SH02　中央土坑断面

写真図版６　１区　遺構４　SB01／P12土器出土状況／P11土器出土状況／P1土器出土状況／P6土器出土状況／SD01断面／SD02断面

写真図版７　１区　遺物　１区出土遺物

写真図版８　２区　遺構１　全景（南東から）／全景（北西から）

写真図版９　２区　遺構２　調査区南壁断面西半部／調査区南壁断面東半部／調査区南壁断面SR01部分／東半部／調査区南壁断面　SR02部分

写真図版10　２区　遺構３　調査区北壁断面西半部／調査区北壁断面　SR02部分

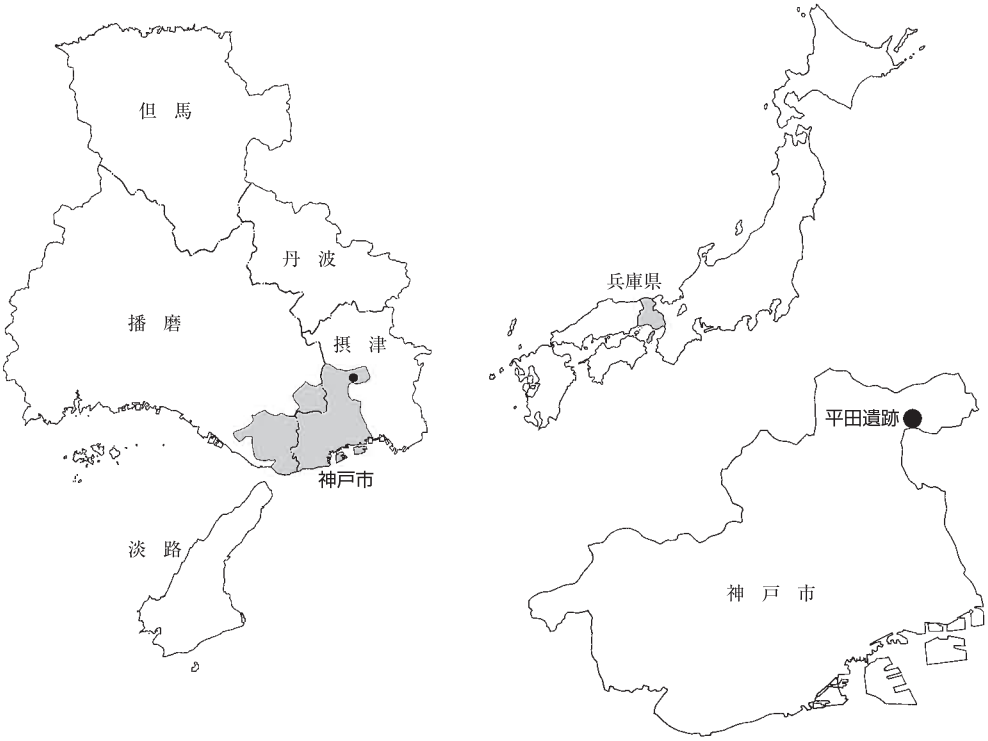
写真図版11　２区　遺構４　SR01／SR01断面（a-a'）／SR01／SR01断面（b-b'-b"）

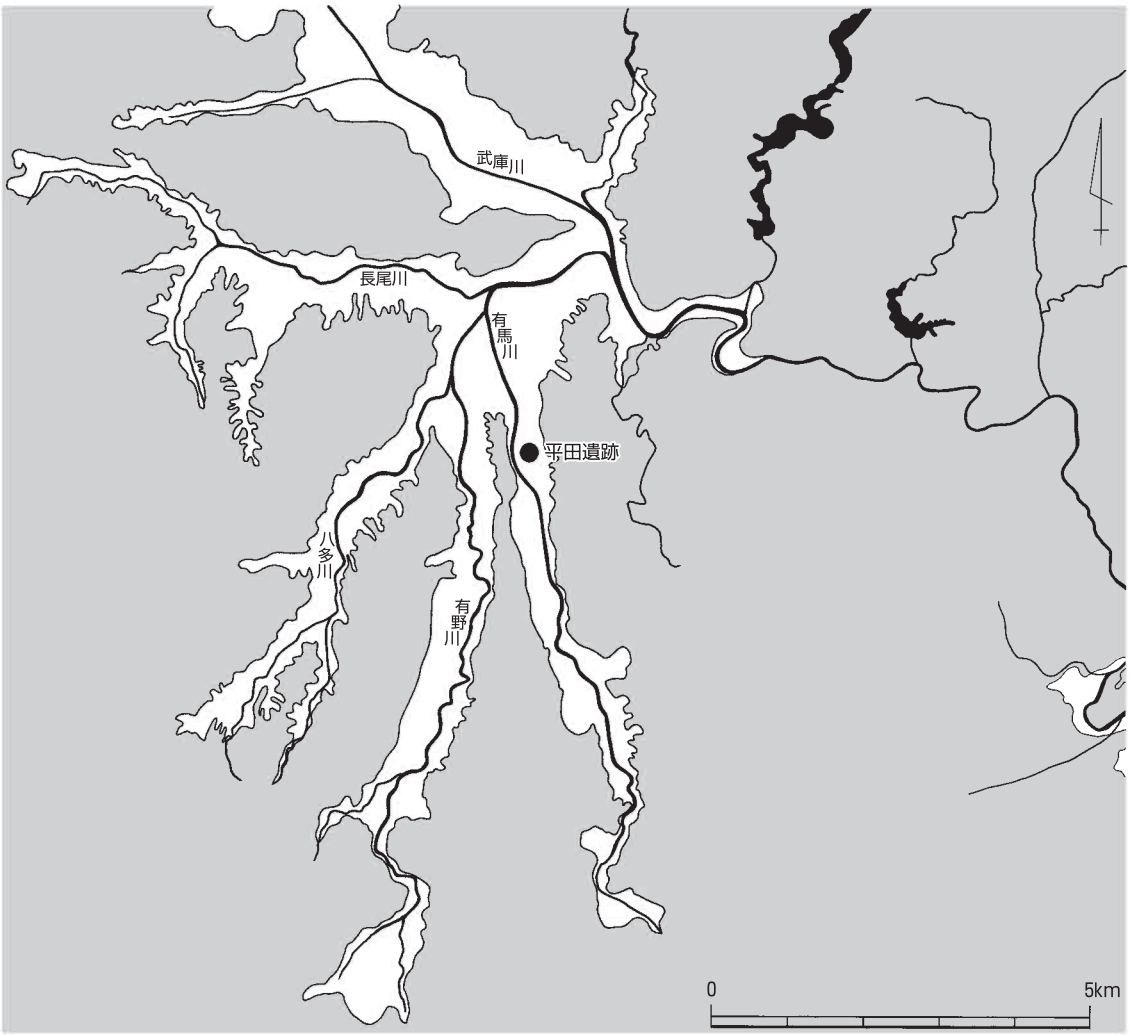
写真図版12　２区　遺構５　SR02／SR02断面（c-c'）／SR02断面（d-d'）／SR02南半杭列／SR02北半杭列

写真図版13　２区　遺物１　SR01出土遺物（１）

写真図版14　２区　遺物２　SR01出土遺物（２）

写真図版15　２区　遺物３　SR02出土遺物





第１図　平田遺跡の位置

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

新名神高速道路は愛知県名古屋市を起点に兵庫県神戸市北区に至る延長約174㎞の路線である。途中、大阪府高槻市で名神高速道路と、終点の兵庫県神戸市北区で中国縦貫自動車道、山陽自動車道と接続する。接続する路線のバイパス機能を有し、阪神間の高速道路の混雑解消が期待される路線である。

兵庫県域の事業については、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所（平成24年６月以前は兵庫工事事務所）が進めている。

新名神高速道路建設に対する埋蔵文化財の対応は、平成10年度に計画路線を対象とした分布調査に始まる。遺物の採集など埋蔵文化財が存在する可能性のある地点については、事業の進捗に応じて平成22年度より確認調査を順次実施している。

第２節　平田遺跡

平田遺跡は、神戸市北区道場町平田に所在する。武庫川の支流有馬川の東岸に位置し、東側に山塊のせまる南北に細長い狭小な平野部に立地する。遺跡は昭和58年度より始まる道場地区ほ場整備事業に関連し、神戸市教育委員会による発掘調査の結果、存在が明らかとなった。確認調査の結果、広域に平安時代以降の遺物を包含する遺物包含層が確認された。遺跡の範囲は平田地区の沖積地、東西約0.5㎞、南北約１㎞である。

本発掘調査は、昭和60・61年度に水路部分を対象に行われた。昭和60年度調査では竪穴住居跡の可能性のある溝、８世紀代の遺物が出土した柱穴列などの遺構が検出される。また山裾付近では中世墓の可能性のある遺構が検出される。遺物は６世紀後半から７世紀前半の須恵器・土師器が出土し、遺跡がこの時期までさかのぼる可能性がある。昭和61年度調査では、各トレンチで土坑、ピットを検出している。調査区以南は確認調査の結果、遺物包含層、遺構は確認できないことから、平田遺跡の南限と考えられている。

第３節　調査の経過

１　分布調査

事業の進捗にあわせて西日本高速道路株式会社関西支社と協議し、平成10年度に計画路線の分布調査を実施した。

調査番号：980063

調査期間：平成10年５月６日～５月13日

調査担当者：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第１課　池田正男・吉識雅仁・西口圭介・池田征弘・松野健児・佐々木俊彦・戸田真美子

神戸市北区道場町平田では、周知の遺跡である平田遺跡の隣接地で中世以降の遺物の散布を確認し№15地点とした。

２　確認調査

分布調査の結果を受け、№15地点を対象とした確認調査は、事業の進捗に対応し、平成22・24年度の２次実施した。

平成22年度

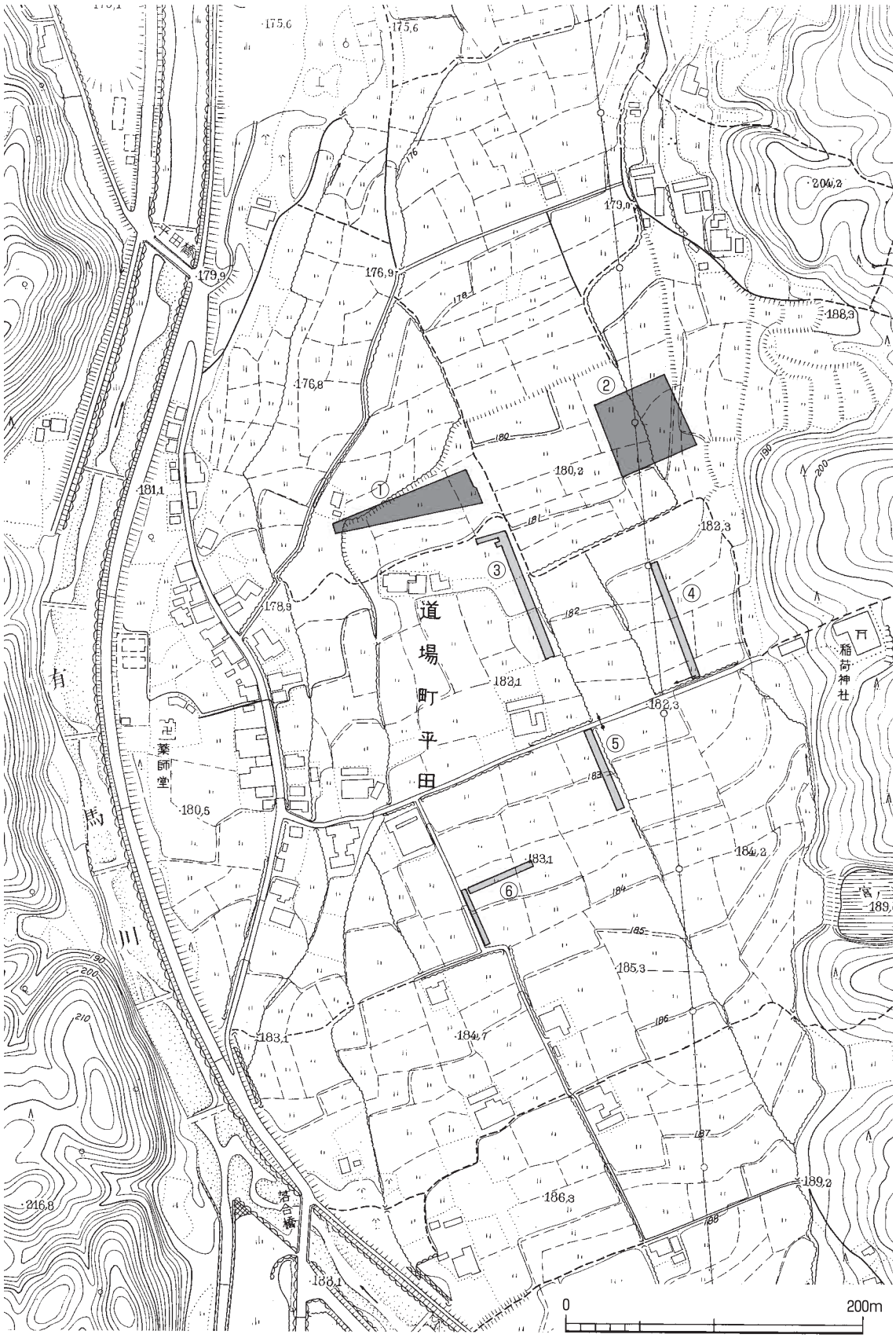
調査番号：2010131

調査期間：兵籍22年７月１日～９月２日

調査担当者：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

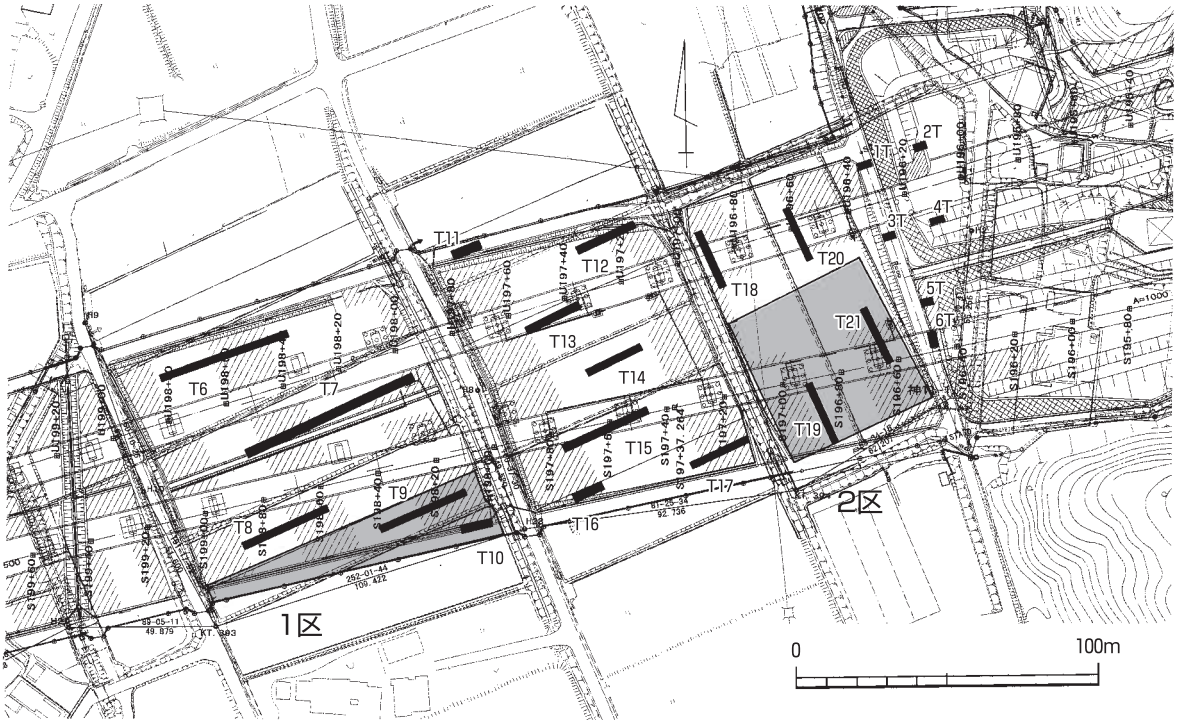
調査第２課　別府洋二・山上雅弘

調査面積：760㎡



① 平成11年度 調査区　② 平成12年度　調査区　③ 昭和60年度 調査区（神戸市教委 1･2トレンチ）
④ 昭和60年度 調査区（神戸市教委 3トレンチ）　⑤ 昭和61年度 調査区（神戸市教委 1トレンチ）
⑥ 昭和61年度 調査区（神戸市教委 2･3トレンチ）

第２図　平田遺跡調査地点位置図



第３図　調査区位置図

Ｔ６～Ｔ21

№15地点に設定したトレンチのうち、Ｔ10では古墳時代の竪穴住居跡、中世の柱穴を、Ｔ19・21で中世の柱穴を検出した。また大半のトレンチで中世以降の溝・土坑状の落ち込みを検出している。遺物は大半のトレンチで須恵器、土師器、陶磁器など中世を主体とする遺物が出土し、Ｔ７・８・15では古墳時代までさかのぼる遺物が出土している。

調査の結果、Ｔ10付近に古墳時代と中世の集落、Ｔ19・21周辺の微高地上に中世の集落が存在する可能性が考えられ、これら２地区について本発掘調査を行うこととした。

平成24年度

調査番号：2012151

調査期間：平成24年11月13日

調査担当者：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課

　　多賀茂治

調査面積：60㎡

概要

１～６Ｔを設定したが、いずれのトレンチでも遺構・遺物は検出できなかった。

なお、同じ平田遺跡の隣接地である№16地点は、平成24年度に確認調査を実施し、全域が有馬川の旧河道あるいは氾濫原であり、平田遺跡の範囲外であることが明らかになった。

３　本発掘調査

平成22年度実施の確認調査成果をもとに事業の進捗に対応し、平成11・12年度に実施した。いずれの調査時も調査終了時に平田地区を対象とした地元説明会を行い、調査成果を地元住民に見て頂いた。

平成23年度

遺跡調査番号：２０１１２６１

調査期間：平成23年11月１日～12月22日

調査面積：1,465㎡

調査担当者：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第２課　山上雅弘・長濱誠司

本報告の１区を対象とした本発掘調査である。調査は小坂遺跡（『堂垣内遺跡・小坂遺跡』兵庫県文化財調査報告第470冊にて報告）の本発掘調査と平行して行った。

発掘調査工事は株式会社福島組、空中写真測量はアジア航測株式会社に委託して行った。

平成24年度

遺跡調査番号：２０１２１４８

調査期間：平成24年12月19日～平成25年２月22日

調査面積：2,688㎡

調査担当者：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

調査第１課　長濱誠司・垣内拓郎

本報告の２区を対象とした本発掘調査である。発掘調査は№16地点の確認調査と平行して行った。

発掘調査工事は株式会社福島組と、空中写真測量は株式会社GIS関西に委託して行った。

第４節　出土品整理作業の経過と体制

平成26年度に魚住分館にて水洗、ネーミング作業を行った後、兵庫県立考古博物館に出土遺物を搬入し、接合・補強から報告書刊行までの諸作業を単年度で行った。

遺物写真撮影は、株式会社クレアチオに、自然科学分析として、出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）を株式会社加速器分析研究所に委託して行った。

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課

保存処理担当：岡本一秀

工程管理：菱田淳子・長濱誠司

非常勤嘱託員等

水洗、ネーミング、木製品保存処理

今村直子・藤尾裕子・吉村あけみ・前谷幸次

接合・補強、復元

荻野麻衣・島村順子・小野潤子・平宮可奈子・上西淳子・沼田眞奈美

実測、図補正、トレース、写真整理、レイアウト

池田悦子・古谷章子

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

平田遺跡は有馬川東岸、東側に山塊のせまる南北に狭小な沖積地に営まれた遺跡で、付近の標高は180m前後を測る。所在地の現在の行政区画は神戸市北区道場町平田であるが、かつては摂津国有馬郡に属していた。この区域は三田盆地の南端にあたり、これ以南は六甲山系北麓部となる。遺跡周辺には主に神戸層群中部累層からなる丘陵が広がる。これを有馬川・有野川・八多川などの武庫川支流の小河川が開析し、奥行きの深い谷部に小規模な段丘面や沖積地が形成される。神戸市北区道場町塩田付近で北流する有馬川、有野川、八多川と東流する長尾川が合流し、さらに郡域の中央を貫流する武庫川に合流する。武庫川は郡域内の大半の支流を集め、武田尾の渓谷を経て六甲山東麓をかすめながら武庫平野に達する。

平田遺跡が所在する三田盆地南部地域は古代の区分に従えば摂津国の一部にあたるが、北・南・東方を山地に隔てられ独立した空間が形成されている。これは現代においても同様であり、本地域の開発が遅れた要因にもなっている。大阪湾岸に広がる平野部へは、三田盆地との境をなす武田尾付近の狭隘な渓谷を経て武庫川を下るルート、山越えの陸路がある。六甲山系南麓の神戸市街地へは古代から利用された有馬道があり、谷部をさかのぼり加古川水系へ至る「湯乃山道」が摂津、播磨を結ぶ主要街道となる。

現在この地域は阪神間への交通網が整備されるとともに、西日本を東西に結ぶ中国縦貫自動車道と山陽自動車道、日本海側とを結ぶ舞鶴・若狭自動車道の結節点となり、本調査の起因となった新名神高速道路がこれに加わる。また交通網の整備に合わせて北摂・三田ニュータウン、北神ニュータウンなどの新都市が造成され人口の流入が激増している。

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

三田盆地南部において旧石器・縄文時代の明確な遺跡はほとんどなく、宅原遺跡群で縄文後期の土坑が検出される他は、塩田遺跡、北神N.T.№４地点遺跡などで少量の遺物の出土が報告されるのみである。

弥生時代

遺跡数が増加するのは弥生時代に入ってからである。塩田遺跡は長尾・有馬・有野の３河川の合流点東側の平野に位置する中期を主体とした拠点的な集落である。前期末から中期後半の遺物が出土しているが、特に付近から産出する通称塩田石を用いた石庖丁の製品・未製品が多量に出土し、石庖丁供給地の可能性が指摘される。鏑射山中腹では磨製石剣が出土している。塩田遺跡の対岸丘陵上に立地する中期～後期の北神N.T.№４地点遺跡があり、竪穴住居跡、段状遺構などが検出される。後期の集落遺跡は主に平野部に展開し、宅原遺跡、日下部遺跡などがある。

古墳時代

弥生時代末～古墳時代初頭には集落を望む丘陵上に墳墓が造営される。定塚古墳群、北神N.T.№45地点遺跡は木棺や土器棺を埋葬主体とする。北神N.T.№９地点遺跡１号墳が４世紀末から５世紀初頭に築造され、付近には同時期の土器棺墓群がある。ただしこの後三田盆地周辺では中期段階でも首長墓といえる古墳は確認できていない。

古墳時代後期になると、河川を眺望する丘陵上に横穴式石室墳が多く築造される。中野古墳群、稲荷神社裏山古墳群、尼崎学園内古墳群などがあり、これらの中には有棚石室を埋葬施設とする古墳がある。

集落遺跡は宅原遺跡で継続的に集落が展開し、日下部遺跡、八多中遺跡、二郎宮ノ前遺跡などでも住居跡が検出される。集落は７世紀に入っても存続する。

古代・中世

宅原遺跡では７世紀に竪穴住居跡に加えて大型掘立柱建物が検出される。「評」、「郷長」など律令期の行政組織に関連すると思われる墨書土器が出土し、地方官衙の存在が有力視される。

８世紀に入ると宅原遺跡群や日下部遺跡の集落は縮小し、二郎宮ノ前遺跡、八多中遺跡、下小名田遺跡で検出された集落も散漫で小規模なものである。９世紀以降八多中遺跡、上小名田遺跡で大型掘立柱建物跡が検出され、谷部の狭い平野でも開発が進んだことがうかがえる。

12・13世紀に入ると遺跡数は増大し二郎宮ノ前遺跡、日下部遺跡、日下部北遺跡、塩田遺跡、宅原遺跡群、八多中遺跡、下小名田遺跡、上小名田遺跡で掘立柱建物跡が検出されている。二郎宮ノ前遺跡は大型掘立柱建物跡とともに園地を有している。

第４図　周辺の遺跡

１．平田遺跡　２．山口町遺跡№４　３．平田上遺跡　４．ヨタノ谷古墳群　５．稲荷神社裏古墳群　６．平田古墳群　７．鯉口古墳群　８．東山中遺跡　９．塩田遺跡　10．南所古墳群　11．尼崎学園古墳群　12．生野遺跡　13．中野古墳群　14．鏑射山遺跡　15．昭願寺古墳　16．自彊遺跡　17．上山古墳群　18．八幡神社古墳　19．八幡神社裏山古墳群　20．八景中学南古墳群　21．鉢屋群集墳　22．天皇山古墳群　23．定塚古墳群　24．宅原遺跡群　25 北神 N.T.№４遺跡　26．北神 N.T.№５遺跡　27．北神 N.T.№45 遺跡　28．日下部遺跡　29．二郎宮ノ前遺跡　30．小坂遺跡　31．堂垣内遺跡　32．八多中遺跡　33．下小名田遺跡　34．上小名田遺跡　35．日下部北遺跡　36．二郎古墳群　37．二郎南古墳群　38．下二郎遺跡　39．東二郎遺跡　40．山口町遺跡№10　41．山口町遺跡№９　42．山口町遺跡№７　43．山口町遺跡№６　44．山口町遺跡№５

第３章　調査の結果

第１節　１区の調査

１　概　要

１区は平田集落北側に位置し、昭和60年度神戸市教委調査の１・２トレンチが南東約20mにある。現況は上下２段となった水田だが、これは1980年代に行われたほ場整備によるもので、本来の地形は南東から北西方向へ緩やかに傾斜していたものと推定される。遺構面は耕土直下で検出される黄褐色系の砂質の強いシルト直上である。北半は削平により遺構面が一部しか残存せず、下層の砂礫層が露頭している。

調査区の北西隅付近は段丘を外れ、旧河道の様相を呈する。

２　遺　構

竪穴住居跡

SH01（第６図　写真図版４）

調査区南東半部で検出した。平面形は東西4.8m、南北4.2mの長方形を呈し、完存する。壁面沿いには周壁溝が巡るが全周はしない。床面長は東西4.3m、南北3.4mを測る。壁高は18㎝である。屋内施設は、土坑を北壁際中央付近（壁際土坑）と北東隅（北東隅土坑）で検出した。床面中央付近は褐灰細砂に黄シルトが混じり硬化し、埋土に炭が混じった浅い土坑、その北側に台石が設置される。また西半には南北方向にのびる浅い溝があり、屋内を区画する溝と考える。柱穴は北西・南東隅で各１基検出したのみである。

遺物は、壁際土坑内より土師器高坏、北東隅土坑内より小型丸底壺が出土している。

SH02（第７図　写真図版５）

調査区西半部で検出した。この付近は旧河道への緩傾斜面にあたり、本住居跡付近の遺構面はSH01付近とは約1.1mの比高差がある。撹乱や削平により遺存状況は良好でない。

平面形は東西3.4m、南北4.0mの長方形を呈し、完存する。周壁溝は隅部で途切れ全周しない。床面長は東西2.7m、南北3.4mを測る。壁高は10㎝程度である。屋内施設は、床面中央付近で中央土坑を検出した。平面長方形を呈する東西1.25m、南北1.65m、深さ３㎝の浅い掘り込みであり、東側周壁溝へ排水溝が延びる。掘り込みの床面は東辺を除いて断続的に壁際に溝が延びる。また北寄りに0.7m×0.5mの楕円形の土坑が掘り込まれる。深さは10㎝程度であり断面は台形を呈する。埋土には少量の炭が混じる。南壁際には台石と考えられる礫がある。柱穴は床面では検出していない。

遺物は埋土内より土師器細片が少量出土したのみである。

掘立柱建物跡

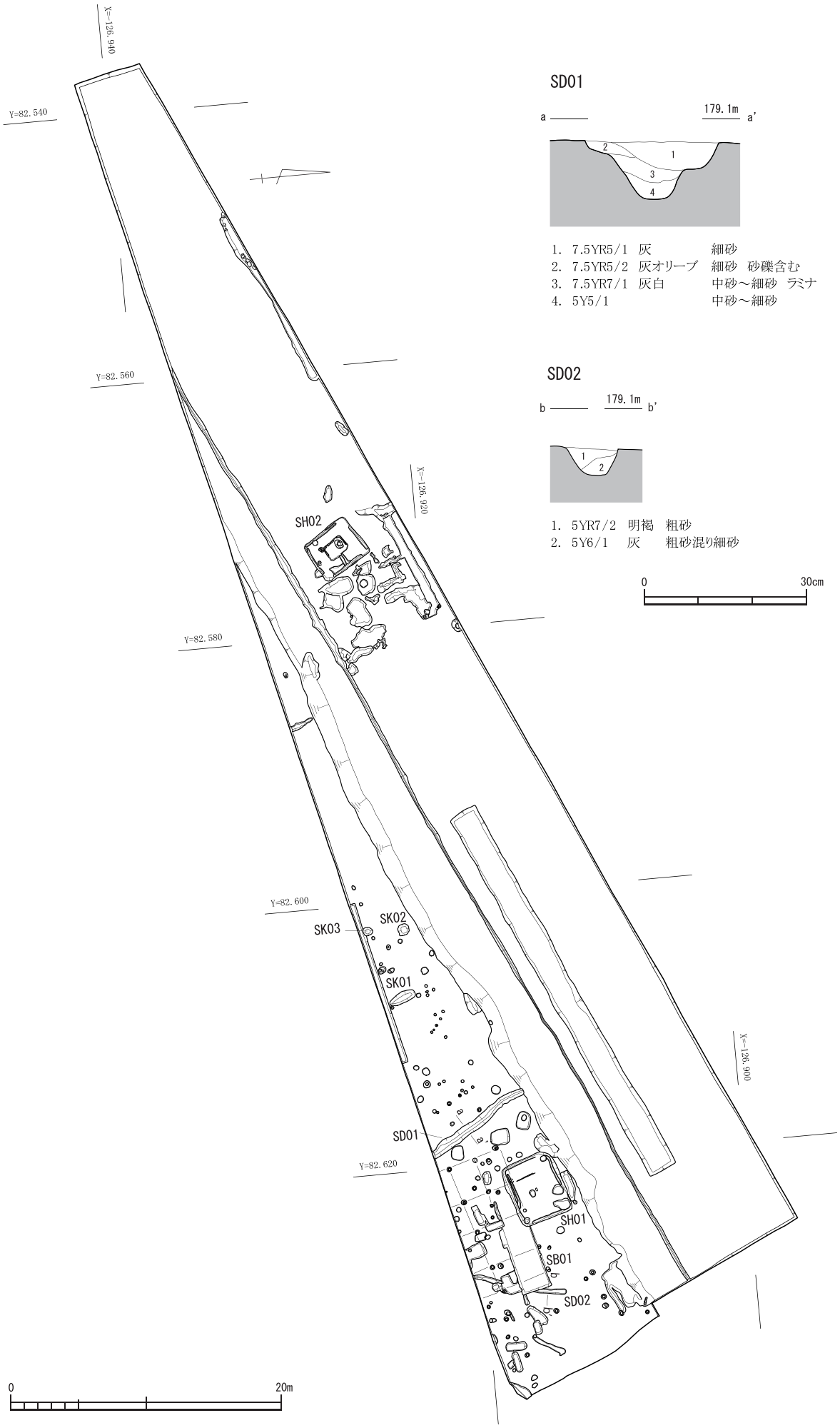
SB01（第８図　写真図版６）

東西４間、南北２間以上の総柱建物であり調査区南側に続く。撹乱やトレンチの深掘りにより柱穴の遺存は良好でない。柱穴の芯々間距離は、南北方向が1.9～2.0mなのに対し東西方向が2.2～2.7mを測る。ただし東側の１間は1.9～2.0mと短くなっている。柱穴は、掘方の径25～35㎝、検出面からの深さ15～35㎝を測る。多くの柱穴では柱抜き取り後に礫を投入するほか、Ｐ１・６には破砕した白磁四耳壺、Ｐ11には土師器甕、Ｐ12には土師器鍋を入れる。

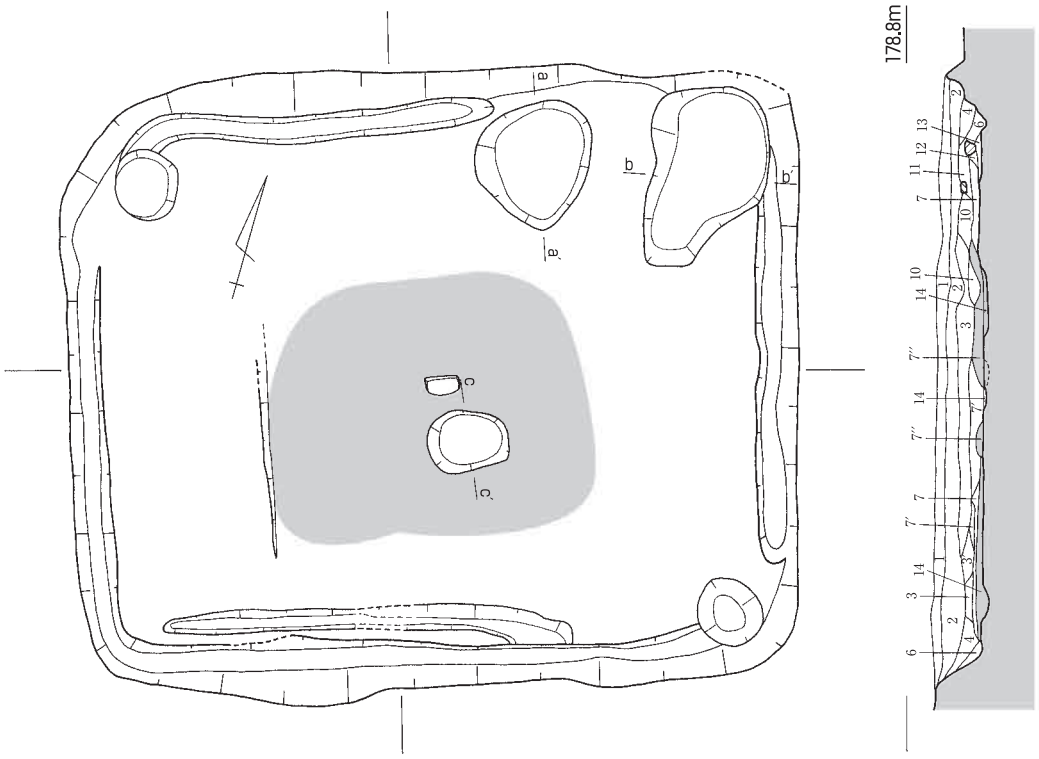
溝

SD01（第５図　写真図版６）

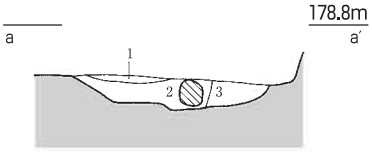
SB01西側で検出した。北側は削平により損なわれるが、南側は調査区外へ続く。幅70㎝、検出面からの深さ30㎝を



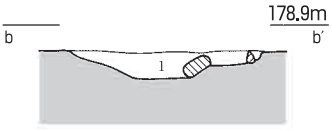
第５図　１区全体図・溝断面図



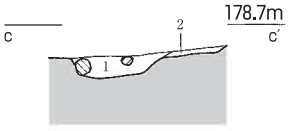
1	5YR4/1	褐灰	極細砂～細砂
2	7.5YR4/1	褐灰	極細砂～細砂
2′			2層と同質　やや粘性が強い
3	7.5YR4/2	灰褐	極細砂～細砂（炭混じり）
3′			3より暗色
4	7.5YR6/1	褐灰	細砂　径1㎜の砂粒を含む
4′			4層より砂粒を多く含む
5	7.5YR4/1	褐灰	極細砂～細砂　径3cm大の角礫を含む
5′			5層より暗色
6	7.5YR7/2	明褐灰	細砂　炭を少量含む
7	7.5YR6/1	褐灰	細砂　炭を少量含む
7′			7層よりやや明色
7″			7層に弧状の黄色シルトを含む
8	10YR7/6	明黄褐	細砂
8′			8層より暗色
9	7.5YR6/3	にぶい褐	細砂　シルト質細砂に含む
10	10YR5/3	にぶい黄褐	細砂
11	7.5YR6/4	にぶい橙	細砂
12	10YR7/3	にぶい黄橙	細砂
13	10YR8/4	浅黄橙	細砂（地山土が汚れた層）
14	10YR3/1	黒褐	シルト質細砂（貼床）



1	7.5YR5/1	褐灰	シルト質細砂と
	2.5Y8/4	淡黄	シルト質細砂ブロック混
2	10YR4/1	褐灰	シルト質細砂
3	10YR6/2	灰黄褐	シルト質細砂（ベース土壌化）

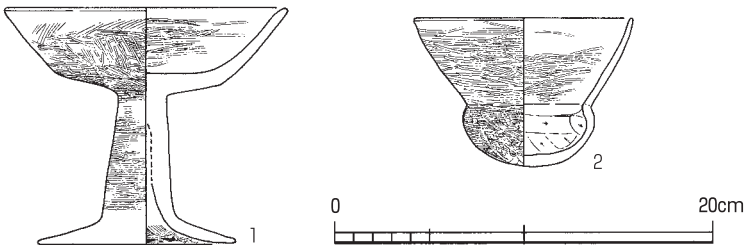


1　7.5R3/1　黒褐　シルト質細砂

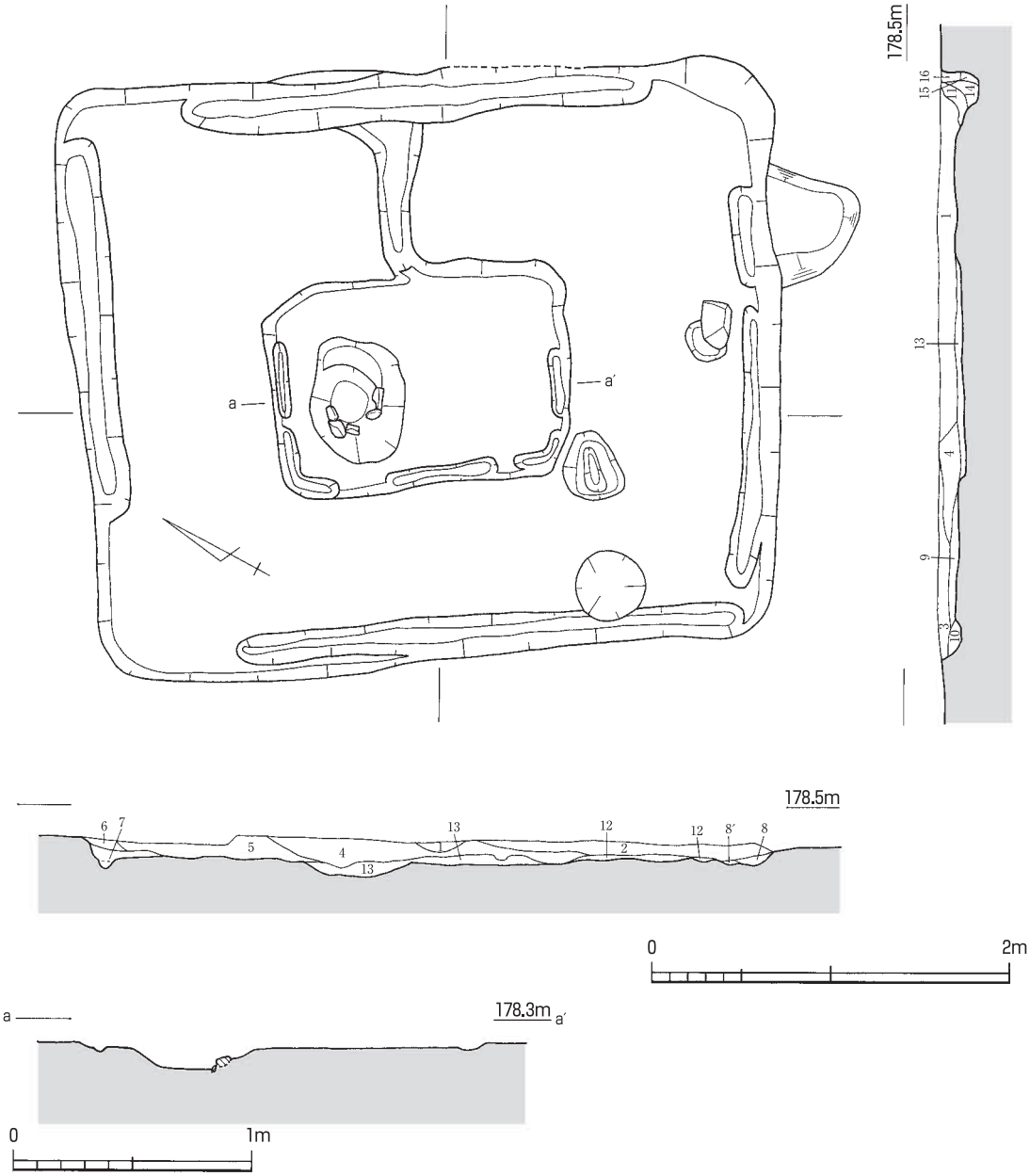


1	N5/	灰	シルト質細砂　炭粒少量含む
2	10YR3/	黒褐	シルト質細砂　炭粒少量含む

0　1m

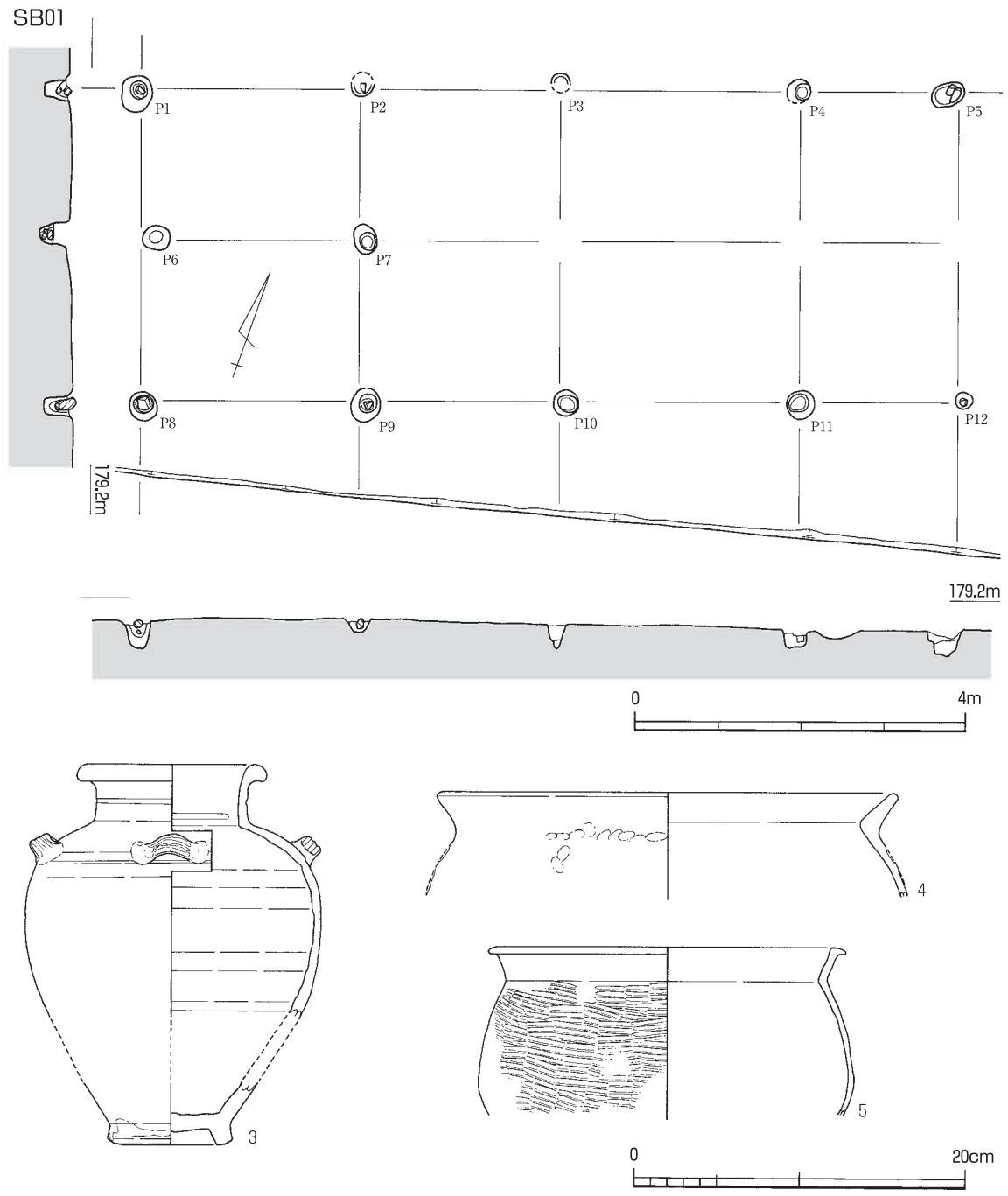


第6図　SH01

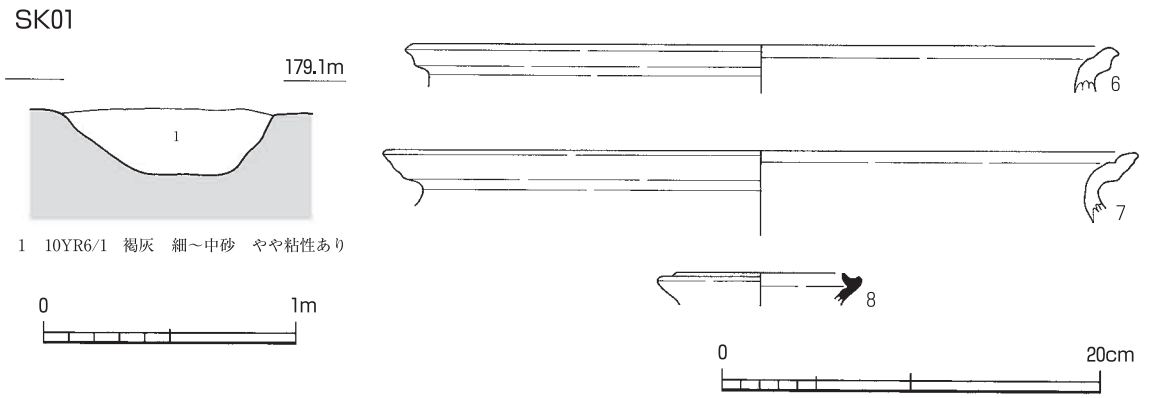


1	7.5YR4/1	褐灰	シルト質極細砂	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂　ブロック状に混じる
2	10YR6/1	褐灰	シルト質極細砂	2.5Y8/6	黄	細砂　ブロック混じる
3	7.5YR5/1	褐灰	シルト質極細砂	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂　ブロック、3cm大礫少量混じる
4	10YR5/1	褐灰	シルト質細～極細砂	20cm 大礫、15 ～ 5cm大以下の礫少量混		
				10YR3/2	灰黄褐	細砂混　3cm大礫混じる
5	10YR6/2	灰黄褐	シルト質極細砂	土器少量包含		
6	10YR6/1	褐灰	シルト質細砂			
7	10YR4/1	褐灰	シルト質細～極細砂			
8	10YR6/2	灰黄褐	細砂			
8′	10YR5/1	灰黄褐	細砂			
9	10YR4/1	褐灰	シルト質細砂			
10	10YR5/2	灰黄褐	シルト質細砂			
11	N5/	灰	シルト質細～極細砂			
12	10YR3/1	黒褐	シルト～シルト質細砂	炭混		
13	7.5YR4/1	褐灰	シルト質極細砂	10YR6/2	灰黄褐	細砂　ブロック状に混じる
14	N5/	灰	シルト質細～極細砂			
15	7.5YR5/1	褐灰	シルト質極細砂	10YR7/6	明黄褐	シルト質細砂（ベース）ブロック混じる
16	7.5YR6/1	褐灰	シルト質細～極細砂			

第７図　SH02



第８図　SB01



第９図　SK01・包含層出土遺物

測る。断面はU字状を呈し、埋土中層はラミナ状の堆積がみられる。遺物は土師器片などが少量出土するのみである。

SD02（第５図　写真図版６）

SB01と重複するが、先後関係は不明である。幅30㎝、検出面からの深さ15㎝である。埋土は粗砂を主体とする。遺物は出土していない。

土坑

SD01西側に所在し、礫などが投入されている。このうちSK01のみ断面図を図示した。SK01は礫とともに丹波焼甕の破片が投入されている。（第９図）

３　出土遺物

SH01出土遺物（第６図　写真図版７）

１は土師器有稜高杯である。壁際土坑埋土上面から出土した。杯部は平坦な底部から口縁部が立ち上がる。脚部は脚柱部から屈曲して裾部が開く。２は小形丸底壺である。北東隅土坑より出土した。やや扁平な体部から口縁部が斜め上方へ開く。

SB01出土遺物（第８図　写真図版７）

３はＰ1・6出土の白磁四耳壺である。口縁部は丸く折り曲げる。体部は卵形を呈し、断面方形の太い高台が付く。４はＰ11出土の土師器甕である。くの字に屈曲した口縁部のみ残存する。５はＰ12出土の土師器鍋である。口縁部は体部から外反し、端部を斜め下方につまみ出す。

SK01出土遺物（第９図　写真図版７）

６・７は丹波焼甕である。いずれも口縁端部を斜め上方に拡張する。

包含層出土遺物（第９図　写真図版７）

８は調査区北側の確認調査Ｔ８から出土した須恵器杯身である。短い口縁部が内傾する。古墳時代後期末のものである。

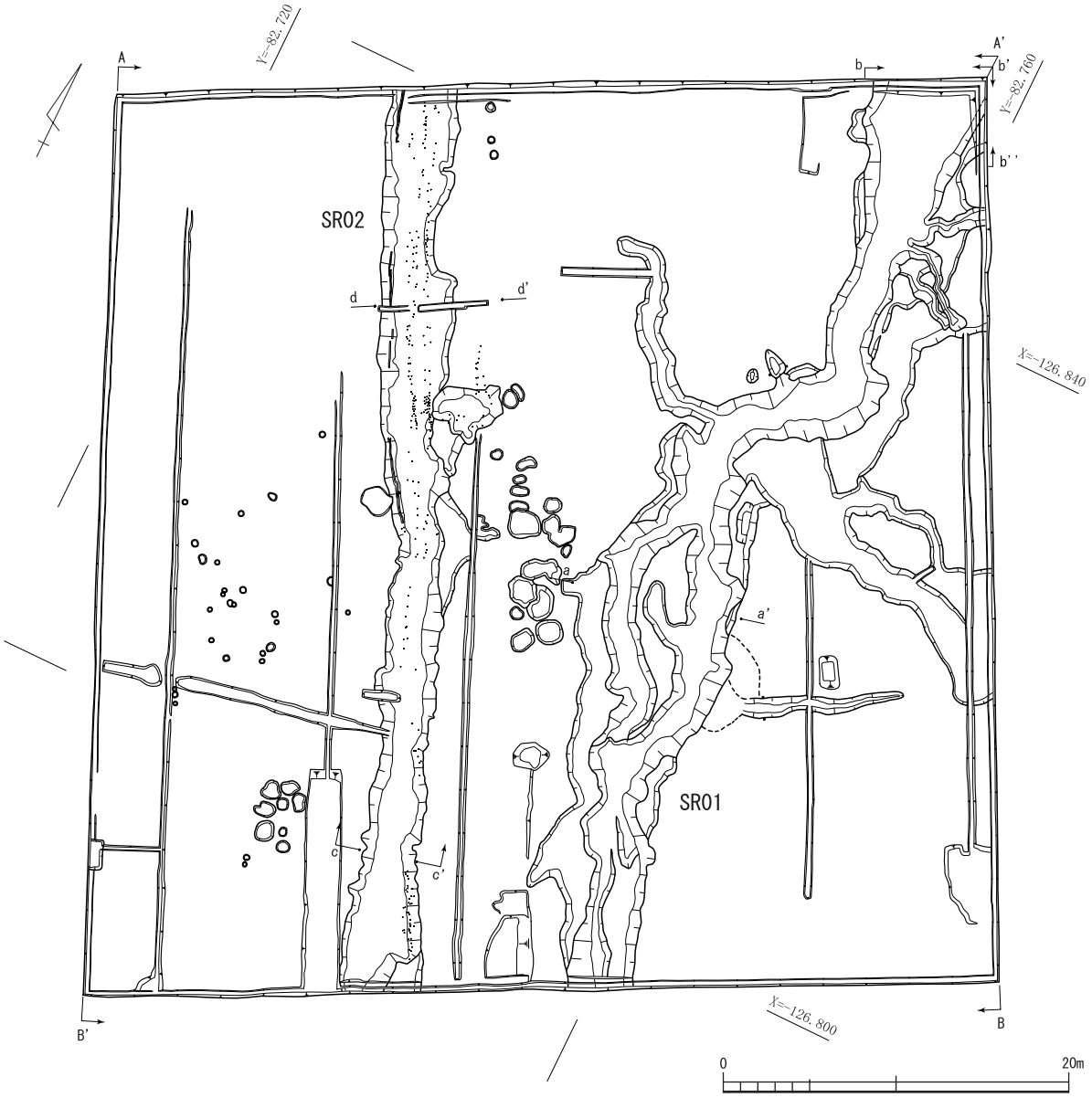
４　小　結

平田遺跡では過去の調査で古墳時代後期の遺物が出土していたが、今回の調査で古墳時代中期の住居が検出され、平田遺跡における古墳時代の生活域が明らかとなった。市教委調査も含めると、１区周辺は遺構密度が比較的高く、本調査区南側が遺跡の中心になるものと考えられる。出土遺物から古墳時代以降、古代・中世まで遺跡が存続していると考えられる。

第２節　２区の調査

１　概　要

２区は平野部の東側山裾に位置し、約0.6ｍの比高差のある水田２筆が調査対象となった。この水田の段差は1980年代に施行されたほ場整備によるもので、それ以前は東から西へ緩やかに傾斜していた。調査区南東半部は山から北西方向にのびる張り出しがあり、この部分では地山が検出でき、北・西方向に落ち込んでいく。地山が検出された部分以外では、部分的に礫層の隆起が見られるものの、大半は黒褐を呈するシルトが厚く堆積し、地山面は確認できない。黒褐シルト層内には木片などの自然遺物は認められるものの、土器などの遺物は出土しない。調査区北壁の断面観察では、少なくとも３面の旧水田面が確認できる。このうち最下層の水田面は黒褐シルト上にあり、土壌層内に中世を主体とする遺物を包含する。出土遺物から、遺跡付近に遺存する方形地割の施行時期は12世紀代と推定される。



第10図　２区全体図

２　遺　構

流路

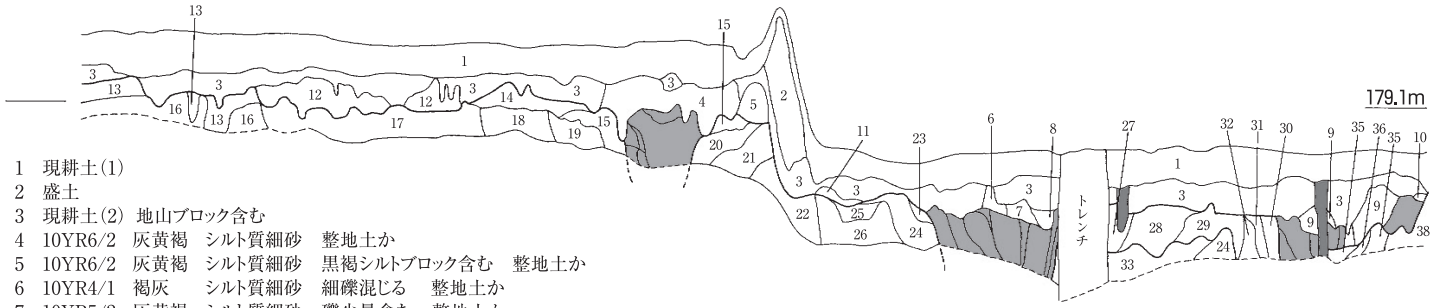
SR01（第13図　写真図版11）

南から北へ蛇行しつつ延び、両端とも調査区外へ続く。幅５～８ｍ、検出面からの深さ0.5～１ｍを測る。埋土は黒褐色を呈するラミナ層であり、最下層は礫層である。最下層内には土器などの遺物を包含し、北東部では律令期の遺物が出土した。

断面観察や出土遺物からこの流路は少なくとも８世紀から10世紀にかけて存続したと考える。埋没後、凹地として残存していたが、その上面は水田化され、方形地割が施行されたとみられる。

SR02（第13図　写真図版12）

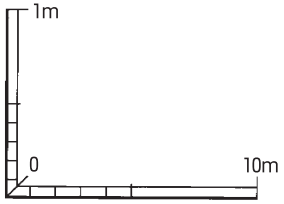
南東－北西方向にほぼ直線的に延び、両端とも調査区外へ続く。幅３～４ｍ、検出面からの深さ0.5mを測る。東西両肩とも立ち上がりは緩やかである。東側の肩は明瞭でなく、北半部ではオーバーフローした痕跡が認められる。付近は湿地状を呈し、足跡が検出できた。



1　現耕土(1)
2　盛土
3　現耕土(2)　地山ブロック含む
4　10YR6/2　灰黄褐　シルト質細砂　整地土か
5　10YR6/2　灰黄褐　シルト質細砂　黒褐シルトブロック含む　整地土か
6　10YR4/1　褐灰　シルト質細砂　細礫混じる　整地土か
7　10YR5/2　灰黄褐　シルト質細砂　礫少量含む　整地土か
8　N5/　灰　シルト質細砂　黒褐シルトブロック含む　整地土か
9　10YR6/2　灰黄褐　シルト質細砂　黒褐シルトブロック含む　整地土か
10　2.5Y5/1　黄灰　シルト　細礫含む
11　10YR5/1　褐灰　シルト質細砂～極細砂　灰白シルト質極細砂ブロック含む　整地土か
12　2.5Y8/2　灰白　シルトと　10YR6/1　褐灰シルト　ブロック含む　整地土か
13　2.5Y5/1　黄灰　シルト　ややグライ化　細礫含む
14　5B7/1　明青灰　シルト質極細～細砂　有機物包含
15　N5/　灰　シルト～シルト質細砂　有機物包含
16　2.5Y8/4　浅黄　シルト質細～中砂　グライ化　細礫多く含む
17　N6/　灰　シルト質極細砂　グライ化　礫含む
18　N6/　灰　シルト～シルト質極細砂　グライ化　細礫多く含む
19　N4/　灰　シルト質細砂　グライ化　礫多く含む
20　N7/　灰白　シルト

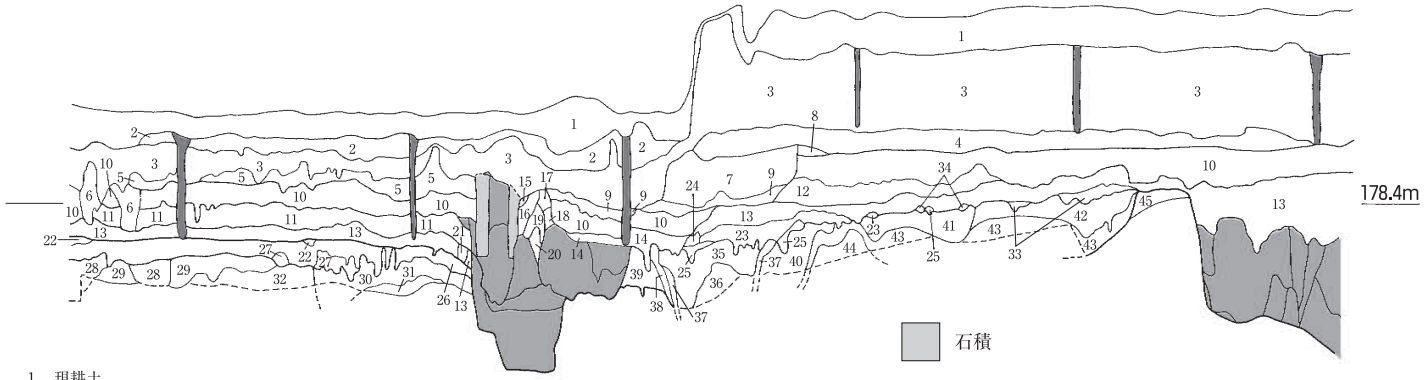
流路

現水田の暗きょ



21　N5/　灰　シルト
22　N6/　灰　シルト質極細砂～細砂
23　N5/　灰　シルト質極細砂
24　N3/　暗灰　シルト
25　N5/　灰　シルト　グライ化
26　N5/　灰　シルト　礫少量含む
27　5B3/1　暗青灰　シルト質細砂
28　5B3/1　暗青灰　シルトと　10YR5/1　褐灰シルト質細砂のラミナ　細礫含む
29　N3/　暗灰　シルト～シルト質極細砂
30　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂と　10YR7/1　灰白シルト質細砂のラミナ
31　N3/　暗灰　シルト～シルト質極細砂
32　10YR4/2　灰黄褐　シルト質細砂～細礫
33　径10cm以下の亜円礫層
34　N8/　灰白　細砂　礫含む
35　10YR4/1　褐灰　シルトと　10YR8/1　灰白　細砂のラミナ
36　5B3/1　暗青灰　シルト質細砂
37　5B7/1　暗青灰　シルト質細砂　グライ化
38　5B2/1　青黒　シルト

第11図　2区南壁断面図

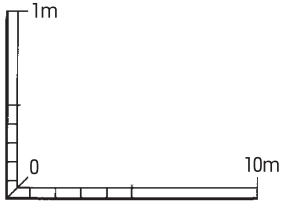


石積

流路

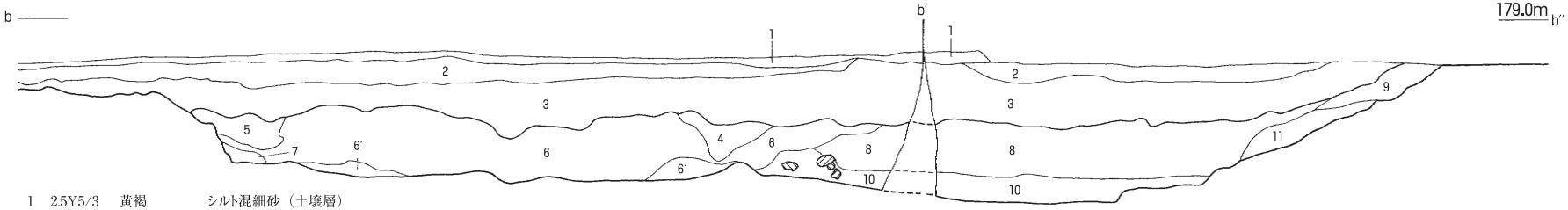
現水田の暗きょ

1　現耕土
2　現床土
3　盛土
4　2.5Y4/6　オリーブ褐　シルト～極細砂混　中砂～細砂（旧耕土）
5　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト混　粗～細砂（旧耕土）
6　2.5Y7/3　淡黄　粗砂と　2.5Y4/2　暗灰黄シルト混　極細～細砂のブロック混じる
7　5Y8/4　浅黄　シルトブロックと　2.5Y4/6　オリーブ褐　極粗砂混
極細砂質シルトブロック混じる　細礫含む（水田盛土）
8　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗砂混　極細砂（旧耕土）
9　2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混　細砂（旧耕土）
10　2.5Y5/2　暗灰黄　粗～極細砂　粗砂の小ブロック含む（旧耕土）
11　10YR4/2　暗灰黄　極粗砂混　シルト質　中～細砂（旧耕土）
12　10YR4/2　暗灰黄　極粗砂混　極細砂質シルト
13　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　極細砂混　シルト質細砂（土器・炭化物包含）
14　2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混　極細～粗砂（旧耕土）
15　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗砂混　細砂～極細砂
16　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗～中砂　2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質
中～細砂のブロック含む　植物遺体包含
17　2.5Y5/3　黄褐　シルト混　粗～中砂
18　2.5Y6/3　にぶい黄　細砂混　粗砂
19　2.5Y4/2　暗灰黄　極細砂質　細～中砂
20　2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混　極細砂質シルト
21　2.5Y6/4　にぶい黄　粗～中砂（ラミナ）
22　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　極細砂質　シルト
23　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　極粗砂混　シルト質　粗～中砂（土壌化）
24　5Y2/2　オリーブ黒　粗砂混　細砂質シルト
25　2.5Y8/2　灰白　極細～細砂
26　10YR2/2　黒褐　極粗～粗砂混　細砂質シルト（土壌化）
27　2.5Y5/2　暗灰黄　中～細砂と　10YR1.7/1　黒シルト　小ブロック含む
28　2.5Y3/1　黒褐　極粗砂混　極細砂質シルト
29　10YR1.7/1　黒　細礫混　細砂質シルト（土壌化）
30　10YR1.7/1　黒　シルト（土壌化）
31　10YR2/1　黒　中～細砂　植物遺体含む（土壌化）
32　10YR3/2　黒褐　細礫
33　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト混　中～細砂
34　2.5Y3/2　黒褐　粗～中砂
35　5Y2/2　オリーブ黒　シルト　中砂ブロック含む　炭化物・植物遺体包含
36　2.5Y4/2　暗灰黄　粗～中砂　植物遺体包含
37　2.5Y2/1　黒　極細砂混　シルト（土壌化）
38　2.5Y2/1　黒　細礫～極細砂混　シルト質極細砂（土壌化）
39　5Y3/2　オリーブ黒　シルト混　細～極細砂（攪乱層）
40　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質　細～中砂
41　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト混　中～細砂
42　2.5Y4/4　オリーブ褐　極細砂混　極粗～粗砂
43　5Y3/2　オリーブ黒　シルト
44　2.5Y4/2　暗灰黄　細～極細砂
45　2.5Y3/1　黒褐　極粗～粗砂混　極細砂質シルト

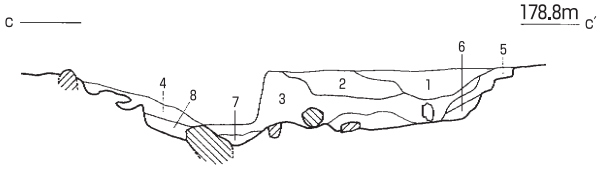


第12図　２区北壁断面図

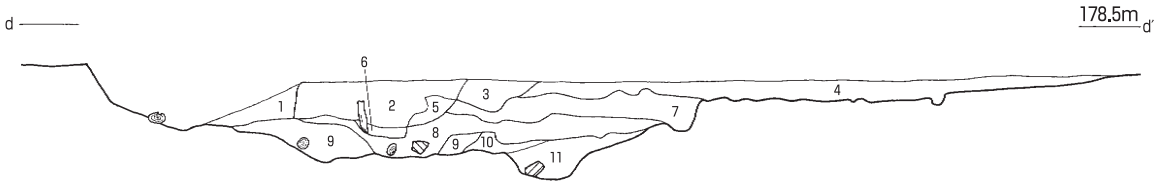
1　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト混細～極細砂　細礫少量含む
2　2.5Y6/3　にぶい黄　細礫～極細砂　上方土壌化(土器包含)
3　2.5Y5/3　黄褐　細礫～極細砂　上方土壌化



1　2.5Y5/3　黄褐　シルト混細砂（土壌層）
2　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト混中～細砂　礫少量含む
3　10YR4/2　灰黄褐　細砂～極細砂質シルト（土壌層）　礫含む
4　10YR3/2　黒褐　中～細砂混シルト（土壌層）
5　10YR3/2　黒褐　シルト混細砂　黒色シルトブロックと細～極細砂のブロック（ラミナ）含む
6　10YR3/2　黒褐　極細砂～細砂と　2.5Y5/2　暗黄灰　粗～中砂の平行ラミナ
6′　2.5Y5/2　暗灰黄　礫（土器包含）
7　10YR4/1　褐灰　中～細砂質シルト
8　10YR3/2　黒褐　シルト～極細砂と　2.5Y5/2　暗灰黄　細～中砂の平行ラミナ（植物遺体含む）
9　2.5Y5/2　暗灰黄　細～中砂の平行ラミナ
10　2.5Y5/1　黄灰　細礫（土器・木器包含）
11　2.5Y5/2　にぶい黄褐　細礫

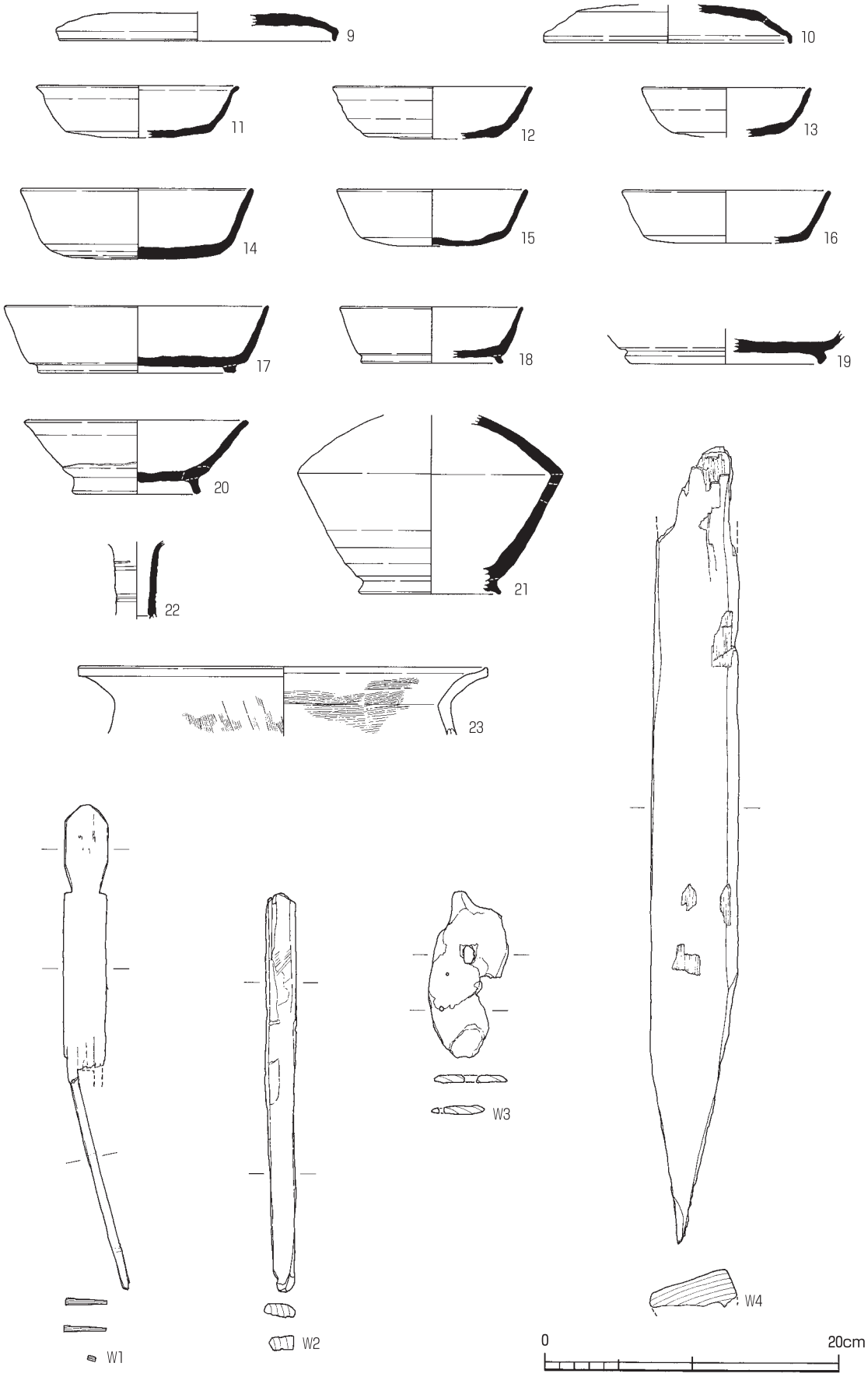


1　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混細～極細砂　細礫少量含む
2　2.5Y4/2　暗灰黄　極細砂質　極粗砂～粗砂（植物遺体含む）
3　2.5Y6/2　灰黄　極粗砂～細砂のラミナ（植物遺体含む）
4　5Y4/1　灰　中～細砂（植物遺体含む）
5　10YR4/2　灰黄褐　シルト質細～極細砂　0.5cm大亜角礫含む
6　2.5Y6/2　灰黄　シルト～粗砂
7　2.5Y6/3　にぶい黄褐　粗砂～極細砂（ラミナ）
8　7.5YR5/8　明褐　礫質極細～粗砂



1　10YR8/6　黄橙　細砂～細礫のラミナ
2　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂と　10YR8/4　浅黄橙　細砂のラミナ（木片多く含む）
3　10YR6/1　褐灰　シルト質細砂と　10YR8/4　浅黄橙　細砂のラミナ
4　10YR5/1　褐灰　シルト質細～中砂と　10YR7/2　にぶい黄橙　細～粗砂のラミナ（土壌化）
5　10YR5/1　褐灰　シルト（木片含む）
6　2.5Y5/1　黄灰　シルト（有機物若干含む）
7　N6/　灰　シルト質細～極細砂　N4/　灰　シルトのブロック混じる
8　2.5GY7/1　明灰オリーブ　細砂と　10YR5/1　褐灰シルト（有機物含む）のラミナ
9　10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂～シルト（木片多く含む）
10　5B3/1　暗青灰　シルト
11　2.5Y5/1　黄灰　シルトと　2.5GY　明オリーブ灰　細～粗砂のラミナ

第13図　SR01・02断面図



第14図　SR01出土遺物

本流路は一帯の方形地割施行に際し、幅を減じて基幹的な水路として利用される。その後も洪水による埋没と再掘削を繰り返し、近世以降は石積や杭などによる護岸が整備された。埋土内からは中近世を主体に、古代～近代の遺物が出土している。

3　出土遺物

SR01出土遺物（第14図　写真図版13・14）

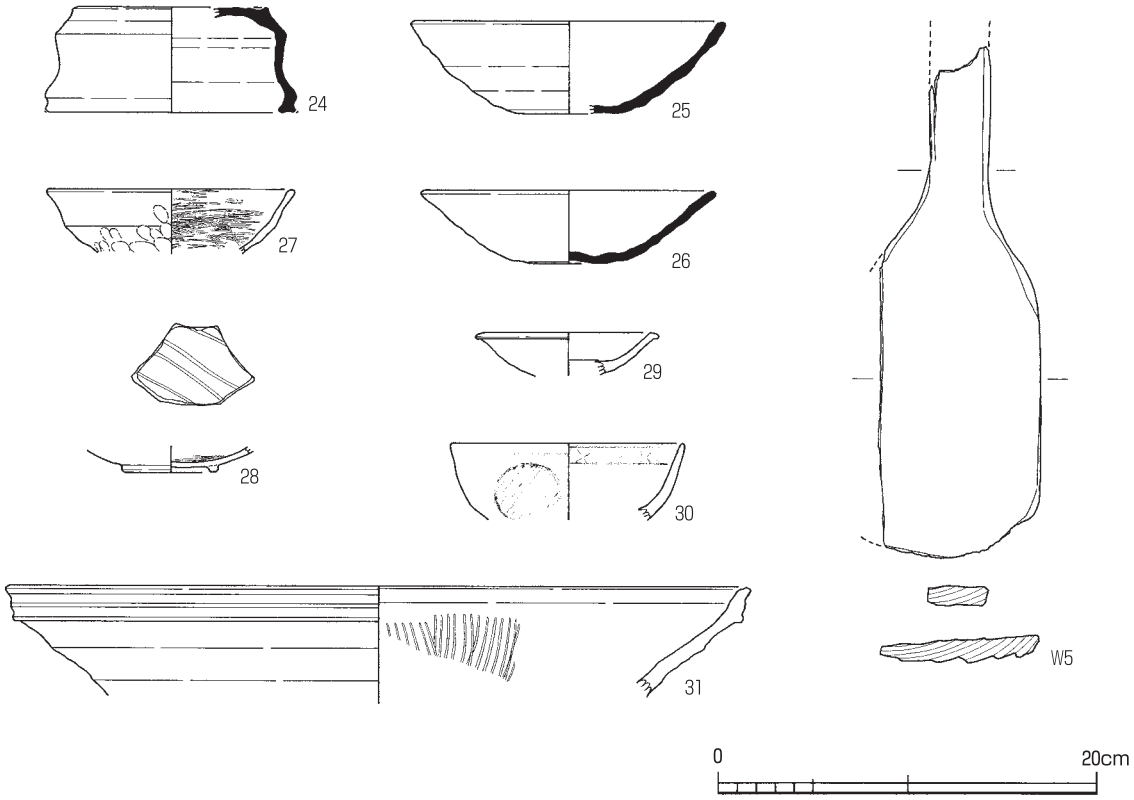
９・10は須恵器杯蓋である。９は扁平な器形で、口縁端部を短く内側に屈曲させる。10は天井部と口縁部との境界の稜が明瞭である。11～16は須恵器杯Aである。平坦な底部から屈曲し、口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものがある。11は口縁端部を外反させる。17～19は須恵器杯Bである。高台は、17は短く直立し、18・19は外に踏ん張る形態である。20は須恵器椀である。底部と体部の境界付近に外に踏ん張った高台を貼り付ける。21は長頸壺である。肩部が丸みを持ち、体部との境界に稜を持つ。高台は外へ踏ん張り、底面を内側へ傾ける。22は水瓶頸部であり、２条１組の沈線を巡らせる。口縁部は端部を欠くものの外反する。三田市川端窯跡に類例がある。23は土師器甕である。口縁部はく字状に屈曲して開き、端面は平坦である。

Ｗ１は木製人形である。頭部は両端を切り落として台形状を呈する。また首は、上方は斜めに、下方は水平に切り落として表現するいわゆる「怒り肩」である。顔は線刻にて表現する。手の表現は確認できない。Ｗ２は棒状材で、表面の一部が炭化している。Ｗ３は円板状を呈する用途不明品である。平面形は楕円形を呈し、一端が突起をもつ。楕円形の穿孔１箇所、釘孔状の小穿孔２箇所が確認できる。Ｗ４は先端を尖らせており杭であろう。

SR02出土遺物（第15図　写真図版15）

24は円面硯である。海は浅く、堤も不明瞭である。円面硯としては最終末の形態である。

25・26は須恵器椀である。体部は25が内湾気味に、26が直線的に立ち上がる。27・28は瓦器椀である。27は内面に密に暗文を施す。28は底部のみ残存する。低い断面方形の高台を貼り付け、内面には疎らな平行ミガキを施す。29は白磁



第15図　SR02出土遺物

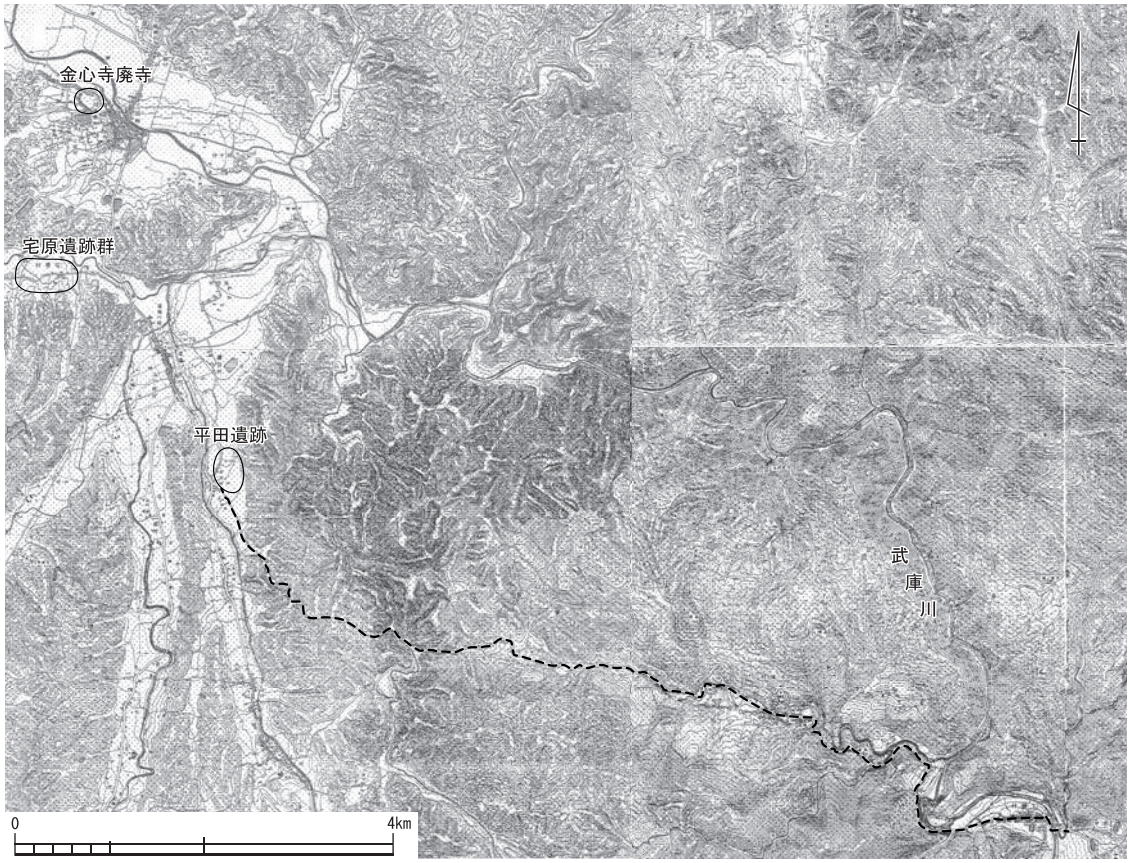
小皿である。30は染付碗で肥前系くらわんか手である。外面に丸文、口縁部内面に斜格子文と界線２条を施す。31は丹波焼擂鉢である。口縁端部を拡張して帯縁をつくり出し、外面に沈線２条を施す。

Ｗ５は杓子形木製品である。先端は丸みをもち、側部は直線的である。身から柄にかけてはなで肩状に細くなる。

４　小　結

２区は地形を大別すると、南東半の丘陵裾部と、それ以外の低湿地に分けられる。遺構は２本の流路を検出したのみであり、本調査区は生活域を外れていたことが考えられる。遺構面は南東半部は耕土直下で検出した地山であるが、それ以外は安定した面は確認出来ず、黒褐系のシルト層あるいは礫層が厚く堆積する。昭和58年度に神戸市教委が本調査区北側で実施した確認調査では、耕土･床土以下で黒灰色粘土層が続くことから平田地区一帯がこのような地形にあり、本調査区も同様の状況を呈しているようである。

SR01は東岸が地形の段差として痕跡が残っていたが西岸側は現況では認められなかった。これは流路の大半が埋没後に一帯の水田開発が行われたためとみられ､この造成が平田地区一帯に見られた方形地割の施工に該当すると考える。この時、もう一本の流路であるSR02が地割の基幹的な水路として整備される。出土遺物から一帯の水田化は少なくとも12世紀までさかのぼると推定する。その後SR02は洪水による埋没と再掘削を繰り返しつつ、1980年代に行われたほ場整備前まで水路として利用されていた。



第16図　律令期の主要遺跡と交通路

第４章　自然科学分析

平田遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

平田遺跡は、兵庫県神戸市北区道場町平田（北緯34°51′9″、東経135°14′11″）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡SH01出土炭化物１点である（表１）。

２　測定の意義

竪穴住居跡の築造年代を特定する。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示

した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

試料１の^{14}C年代は1750±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は246～330cal ADの間に２つの範囲で示され、弥生時代後期から古墳時代前期頃に相当する（小林2009、佐原2005）。

なお、試料１が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009、坂本2010など）。その日本版較正曲線を用いて試料１の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第１表　放射性炭素年代測定結果(1)（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC（%）
IAAA-140937	1	SH01　床面	炭化物	AAA	-29.26 ± 0.44	1,750 ± 20	80.40 ± 0.23

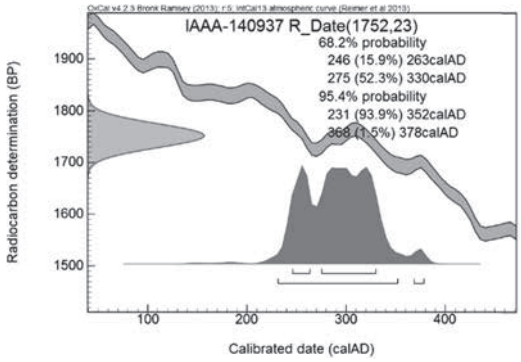
［＃6750］

第２表　放射性炭素年代測定結果(2)（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-140937	1,820 ± 20	79.70 ± 0.22	1,752 ± 23	246calAD - 263calAD（15.9%） 275calAD - 330calAD（52.3%）	231calAD - 352calAD（93.9%） 368calAD - 378calAD（ 1.5%）

［参考値］

文献
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1），337-360
小林謙一　2009　近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82
尾嵜大真　2009　日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学１　弥生文化の輪郭，同成社，225-235
Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55（4），1869-1887
坂本稔　2010　較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第５回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19（3），355-363



第17図　暦年較正年代グラフ（参考）

第５章　まとめ

有馬川東岸では、道場町塩田から平田にかけて1980年代まで方形地割が残存し、平田地区がその南限となっていた。この地割の南北方向は、N-20～25° Wの偏りを示し１区SB01、２区SR02も概ね同方向を示している。水田土壌層や流路の出土遺物から方形地割の施行時期は12世紀代と推定され、この時期に調査対象地を含めた道場地区の低湿地の開発が進んだものと考える。

今回の調査では２区検出のSR01から律令期の遺物がまとまって出土し、上流部に律令期の遺跡の存在が想定される。これとは別に２区東側の山裾（№14地点）で行われた平成24年度実施の確認調査でも古代を中心とする土器が採取されている。出土は水田整地・盛土内からであり、良好な出土状況とはいえないが、律令期の遺物を包含する遺物包含層が付近に存在した可能性を示しているといえよう。

SR01出土土器の所属時期は、奈良時代前期から平安時代まで幅をもつが、出土した須恵器杯は比較的丁寧なつくりのものがみられること、量は少ないものの円面硯や木製人形の出土がみられることから、遺物の供給元は一般的な集落というよりも官衙的な性格をもつと考える。

遺跡の所在する有馬郡の律令期における行政的中心は明らかでないが、出土した遺物に見られる文字資料などから宅原遺跡群付近が有力視されている。また郡内唯一の古代寺院である金心寺廃寺は武庫川西岸の段丘上に所在する。有馬川流域における律令期の遺構は、１区南側の昭和60年度調査１トレンチで検出された掘立柱建物となる可能性がある柱穴列が唯一の例である。この柱穴列は正方位に近い方向を示し、現存する方形地割施行以前の地割を示していると考えられる。出土遺物から８世紀代のものと推定される。ただし柱穴の規模・形態などから官衙に関連する遺構とは判断できない。したがって、現状では平田遺跡を含む有馬川流域で官衙及びその関連施設といえる遺構は確認されていない。

律令期において官衙的性格をもつ施設が有馬川東岸に所在した可能性を考えてみよう。

有馬郡は大阪湾岸の平野部を中心とする摂津国の主要部とは地形的に隔絶した空間であり、武庫川あるいは山越えの陸路によってのみ平野部とむすばれる。平田地区は有馬郡の中でも地理的に平野部に最も近い地点である。平田遺跡の南東側には崩落により傾斜が比較的緩くなった谷筋が南東方向にのびている。この谷筋をさかのぼることにより、山塊のピークに到達することが可能であり、この谷筋が有馬郡と平野部を結ぶ陸路として利用された可能性がある。平田地区は山越えの起点にあたることから、律令期には陸上交通に関連する郡レベル以上の施設がこの地に所在した可能性を考える。出土遺物の少なさや出土状況が良好でないという面があるものの、出土遺物の所属時期は８世紀～10世紀と幅があり、施設はほぼ律令期を通して存続していたものと推定される。今後の周辺部の調査成果に期待したい。

報 告 書 抄 録

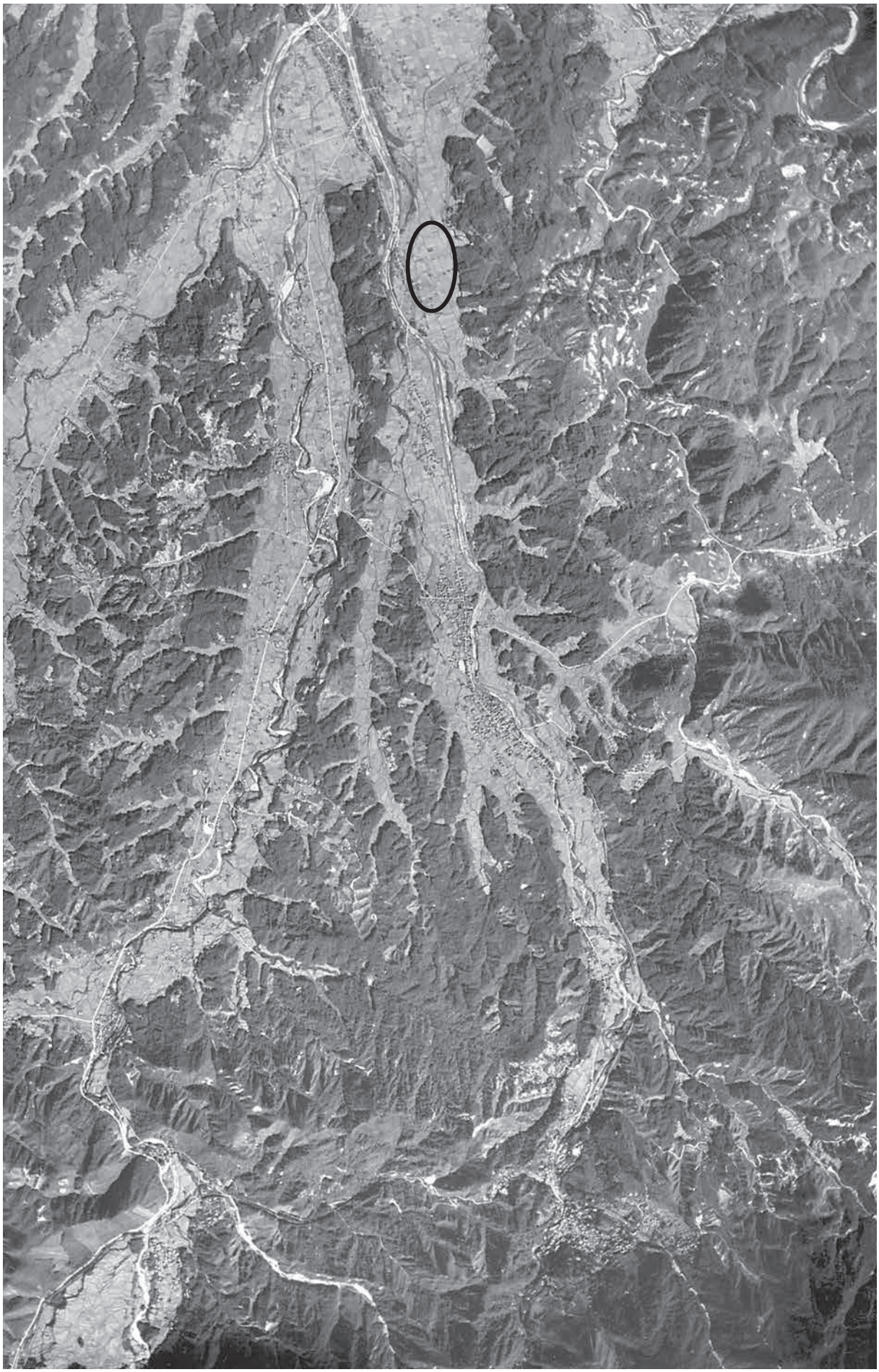
ふりがな	ひらたいせき
書名	平田遺跡
副書名	新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第479冊
編著者名	長濱誠司
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-362-3784
発行年月日	平成27(2015)年3月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新名神No15地点	神戸市北区道場町平田	28109	15105	34°51′10″	135°14′15″	20100701～20100902 (2010131)	760㎡	記録保存調査
平田遺跡				34°51′09″	135°14′11″	20111101～20111222 (2011261)	1,465㎡	
				34°51′11″	135°14′17″	20121219～20130222 (2012148)	2,688㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡	土師器	遺跡で初めて当該期の住居を確認した。
		奈良・平安時代	流路	須恵器・土師器・木製品	付近に官衙の所在する可能性がある。
		中世	掘立柱建物跡・溝	須恵器・土師器・瓦器・白磁	集落の中心となる屋敷を確認。

平田遺跡は、武庫川支流有馬川東岸に所在する。1区の微高地上は古墳時代以降の生活域となっており古墳時代中期の竪穴住居跡2棟、中世の掘立柱建物跡1棟などの遺構が検出されている。周辺の調査でも遺構の密度が比較的高く、本調査区付近が遺跡の中心になるものと考える。2区付近は生活域を外れており、2本の流路を検出した。うちSR01からは奈良・平安時代の遺物が出土し、精良に作られた土器や木製人形などがみられることから、遺跡周辺に未知の官衙的性格を有する施設が所在した可能性がある。本流路埋没後に平田地区の水田化が進む。残る1本の流路、SR02は一帯が水田化された中世以降に水路として整備されている。

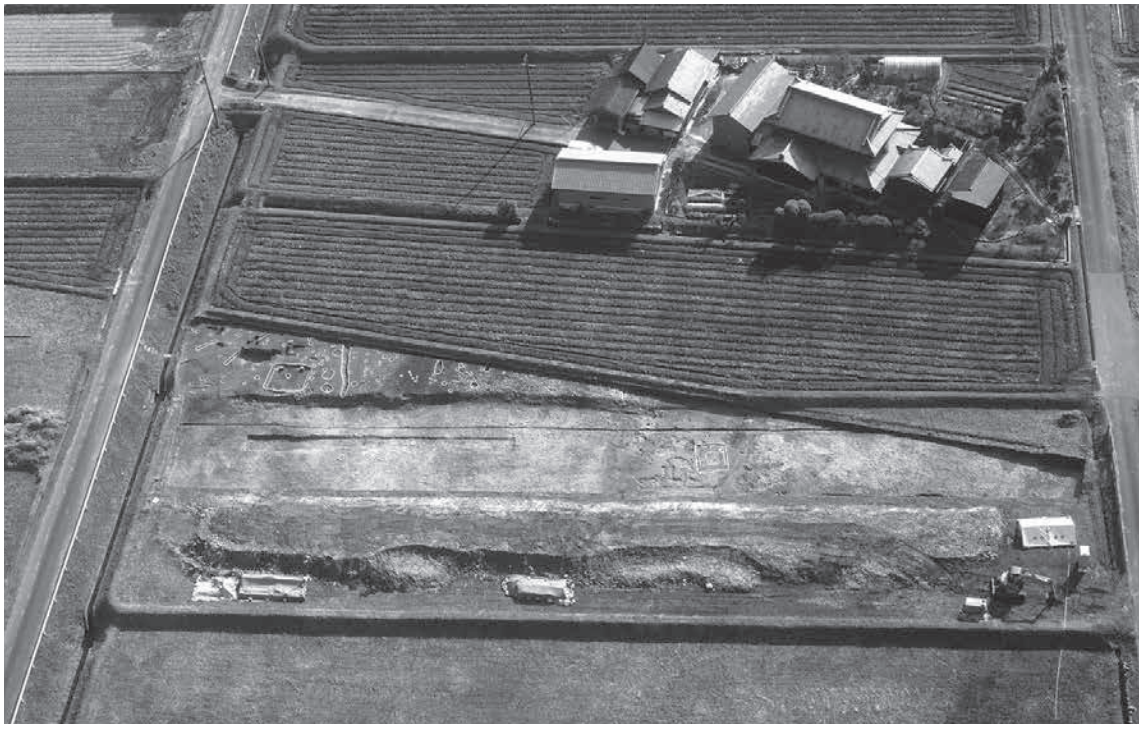
写 真 図 版



遺跡周辺　航空写真（1947年　米軍撮影）

遺跡全景（南から）

遺跡全景（南西から）



全景（北から）

全景（北東から）

全景（南西から）

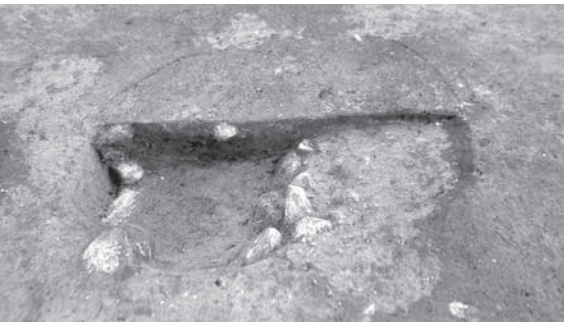
SH01（北東から）

SH01　東西断面（南東から）

SH01　南北断面（北東から）

左）北東隅土坑　断面（南から）
右）北東隅土坑　土器出土状況（南から）

左）壁際土坑　断面（南西から）
右）壁際土坑　土器出土状況（北東から）

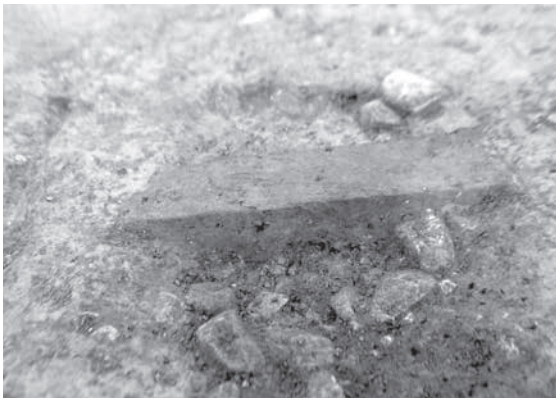


中央炉　断面（南から）

SH02（南西から）

SH02　東西断面（南東から）

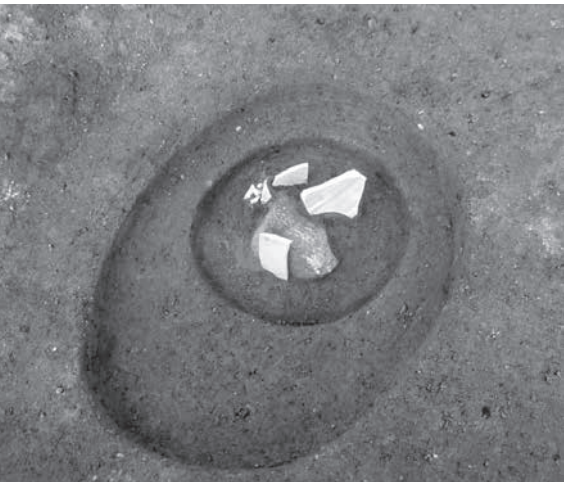
SH02　南北断面（南西から）



左）SH02　中央土坑
（南西から）
右）SH02　中央土坑断面
（南西から）

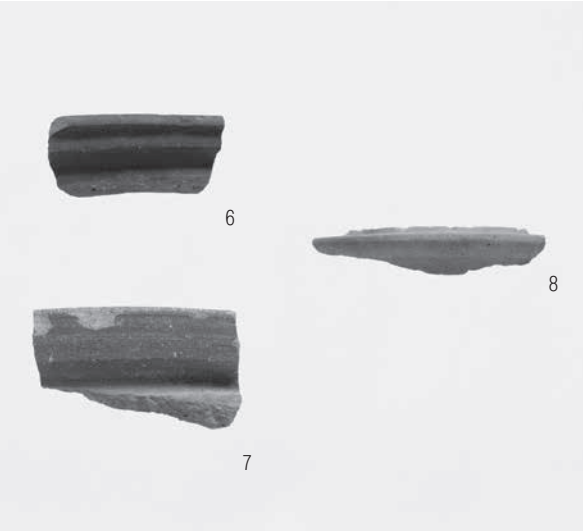
SB01（東から）

左）P12土器出土状況（南から）
右）P11土器出土状況（南から）



左）P1土器出土状況（南から）
右）P6土器出土状況（西から）

左）SD01断面（南から）
右）SD02断面（南から）



1区出土遺物

全景（南東から）

全景（北西から）

調査区南壁断面　西半部
（北から）

調査区南壁断面　東半部
（北から）

調査区南壁断面
SR01部分（北から）

調査区南壁断面
SR02部分（北西から）

調査区北壁断面　西半部
（南西から）

調査区北壁断面　東半部
（南東から）

調査区北壁断面
SR02部分（南東から）

SR01（北東から）

SR01断面
（a-a'：南東から）

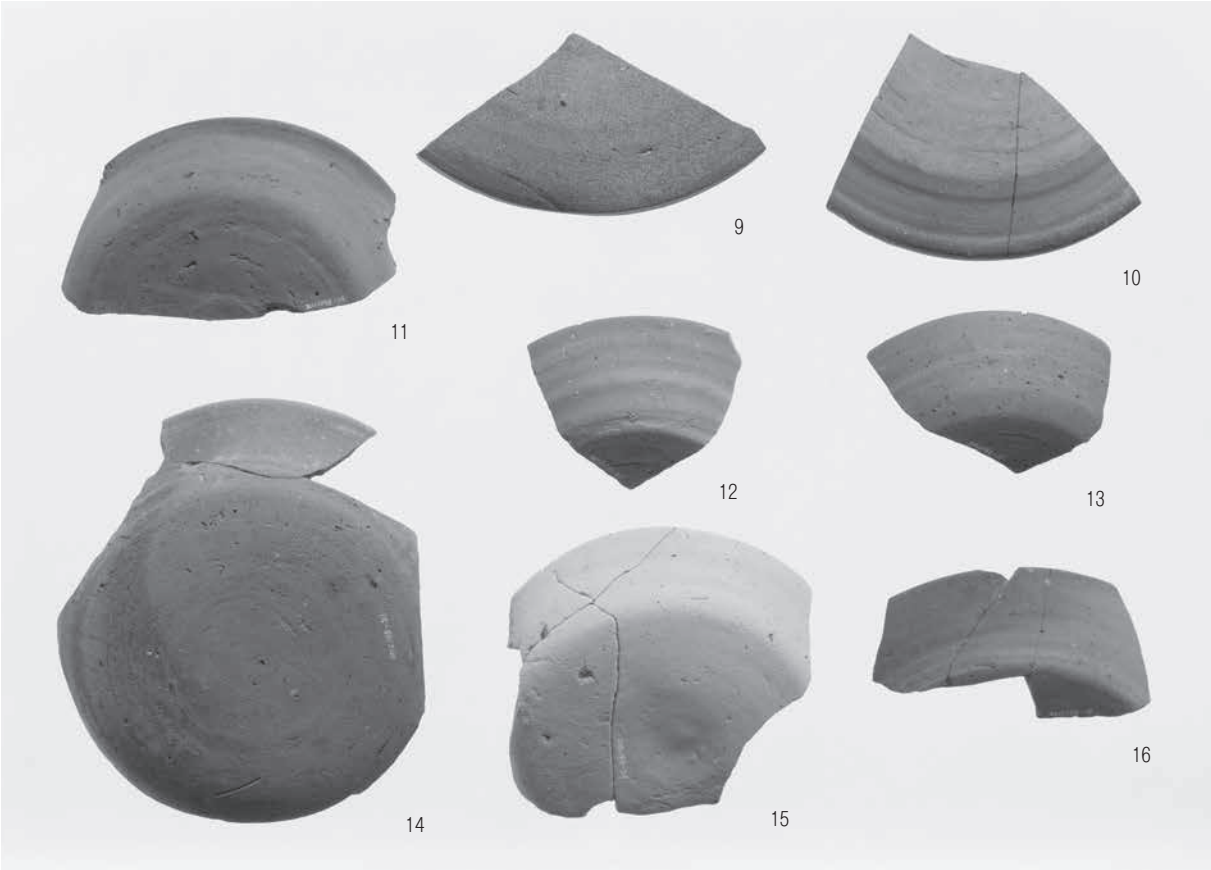
SR01断面
（b-b'-b"：南東から）

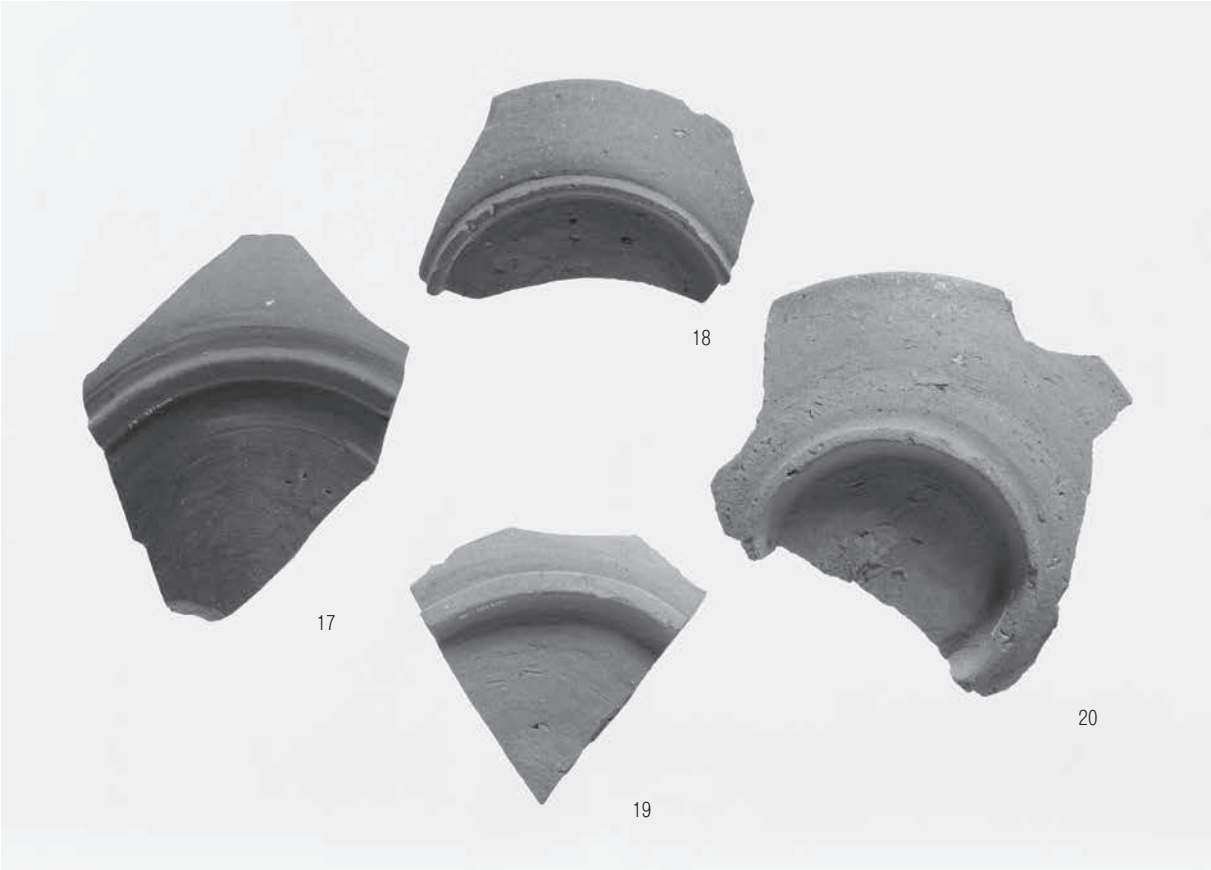
SR 02（南東から）

SR 02断面
（c-c'：南東から）

SR 02断面
（d-d'：南東から）

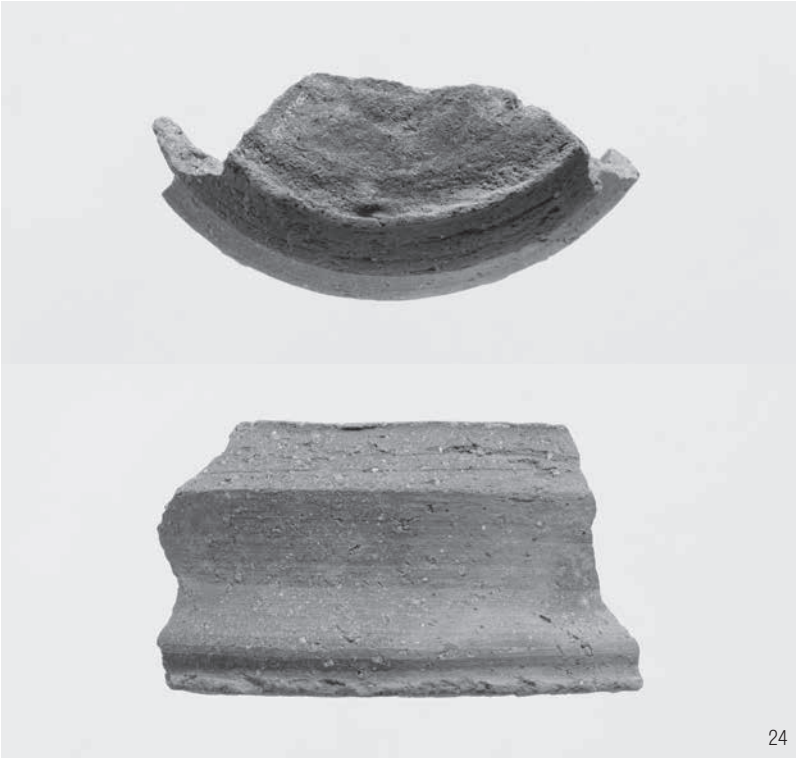
左）SR 02南半杭列（南東から）
右）SR 02北半杭列（北西から）

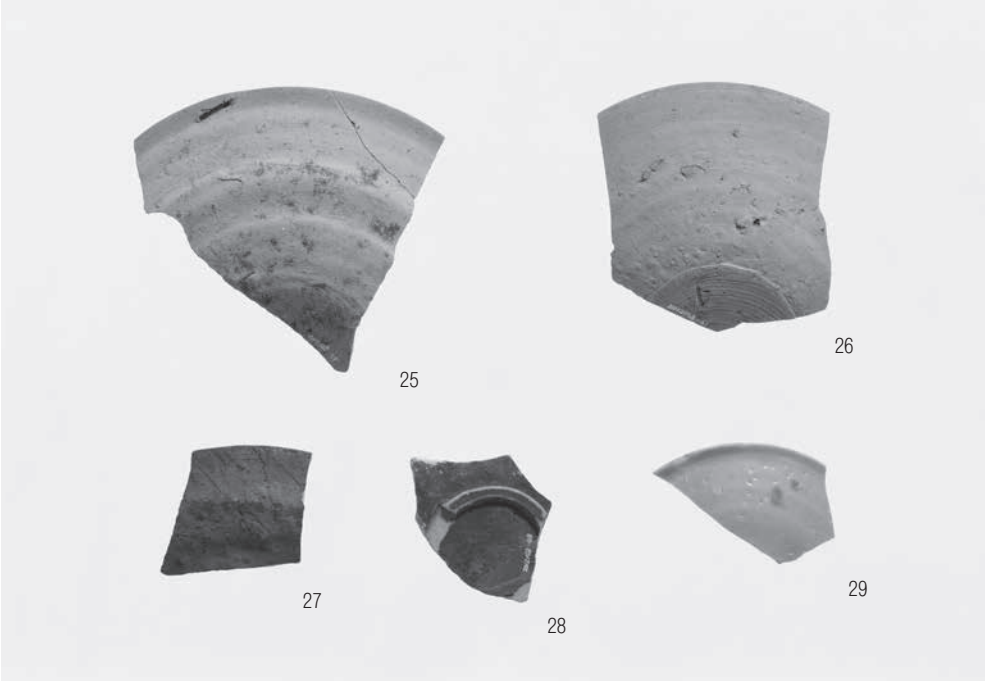


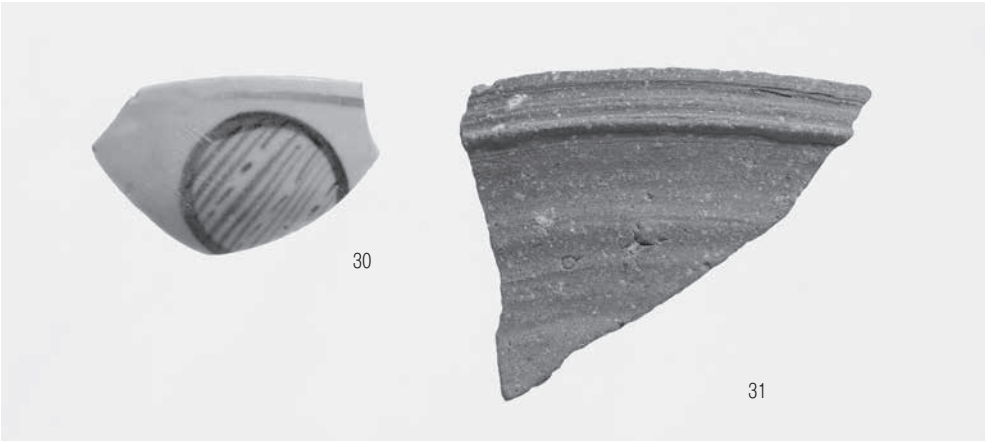


SR01出土遺物（１）

SR01出土遺物（２）







SR02出土遺物

兵庫県文化財調査報告　第479冊

神戸市北区

平　田　遺　跡

－新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成27（2015）年３月28日　発行

編　集　公益財団法人
兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39